

# 六波羅政庁跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇二五―五

六波羅政庁跡

2026年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所



# 六 波 羅 政 庁 跡

2026年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、宿泊施設新築工事に伴う六波羅政庁跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和8年5月

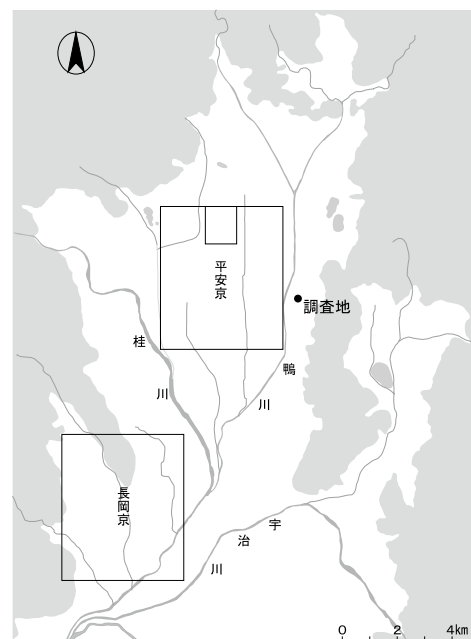
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- 1 遺 跡 名 六波羅政庁跡（京都市番号 24S231）
- 2 調査所在地 京都市東山区大和大路五条上る山崎町341-2、345、345-1、346-1～3
- 3 委 託 者 合同会社東山  
株式会社 ETSホールディングス  
業務執行社員 代表社員 執務執行者 上江洲 剛
- 4 調査期間 2025年4月7日～2025年7月18日
- 5 調査面積 204㎡
- 6 調査担当者 鈴木康高
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 10 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 11 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 12 本書作成 鈴木康高  
付章1：株式会社パレオ・ラボ
- 13 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 14 協力者 調査・整理作業にあたっては下記の方々からご教示頂いた。記して謝意を表します。（五十音順、敬称略）  
小野映介、西山良平、平尾政幸

（調査地点図）



# 目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	4
(1) 位置と環境	4
(2) 既往の調査	5
3. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 鎌倉時代前半の遺構	6
(3) 鎌倉時代後半の遺構	7
(4) 鎌倉時代末から室町時代の遺構	8
4. 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
(2) 土器類	10
(3) 瓦類	17
(4) 土製品	18
(5) 石製品	22
(6) 金属製品	23
(7) 骨	23
5. ま と め	24
付章1 六波羅政庁跡の花粉分析と寄生虫卵分析	26

# 図 版 目 次

図版1	遺構	第3面遺構平面図 (1:100)
図版2	遺構	第2面遺構平面図 (1:100)
図版3	遺構	第1面遺構平面図 (1:100)
図版4	遺構	調査区南壁断面図 (1:80)
図版5	遺構	調査区東壁断面図 (1:80)

図版 6	遺構	溝 180・190 実測図 (1 : 50)
図版 7	遺構	溝 161・115、土坑 199・121、井戸 34 実測図 (1 : 40)
図版 8	遺構	1 第 3 面東半全景 (北東から) 2 第 3 面西半全景 (北東から)
図版 9	遺構	1 溝 180・190 (南西から) 2 溝 180・190 断面 (北東から) 3 土坑 199 (北から)
図版 10	遺構	1 第 2 面東半全景 (北東から) 2 第 2 面西半全景 (北東から)
図版 11	遺構	1 井戸 34 (北東から) 2 溝 161 (南東から) 3 土坑 68 (北東から)
図版 12	遺構	1 第 1 面東半全景 (北東から) 2 第 1 面西半全景 (北東から)
図版 13	遺構	1 溝 43 東半 (北西から) 2 溝 43 西半 (南東から) 3 溝 43 中央部断面 (南東から)
図版 14	遺構	1 土坑 33 遺物出土状況 (北から) 2 土坑 63 遺物出土状況 (北西から) 3 調査区南壁西半断面 (北東から)
図版 15	遺物	土器類 1
図版 16	遺物	土器類 2
図版 17	遺物	土製品 1
図版 18	遺物	土製品 2、石製品、金属製品、骨

## 挿 図 目 次

図 1	調査地及び周辺調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 400)	2
図 3	調査前全景 (北東から)	3
図 4	1 区重機掘削状況 (北東から)	3
図 5	1 区作業状況 (南東から)	3

図6	2区作業状況（北西から）	3
図7	基準点測量作業状況（南西から）	3
図8	1区遺構測量作業状況（南西から）	3
図9	鈴木委員指導状況（南東から）	3
図10	2区埋戻し状況（南東から）	3
図11	柱穴列1実測図（1：40）	7
図12	土坑63・33・18実測図（1：40）	8
図13	溝43断面図（1：40）	9
図14	溝180・190出土土器実測図（1：4）	11
図15	溝57・161、土坑199・121、井戸34、柱穴173、鎌倉時代整地層1 出土土器実測図（1：4）	12
図16	土坑63・33・18出土土器実測図（1：4）	14
図17	溝43出土土器実測図1（1：4）	15
図18	溝43出土土器実測図2（1：4）	16
図19	瓦類拓影及び実測図（1：4）	17
図20	土製品拓影及び実測図1（1：4）	19
図21	土製品拓影及び実測図2（1：4）	20
図22	石製品実測図（1：4）	22
図23	金属製品実測図（1：4）、銭貨拓影（1：2）	23

## 表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	10



# 六波羅政庁跡

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯 (図1)

本調査は、宿泊施設新築工事に先立って実施した埋蔵文化財発掘調査である。調査地は、京都市東山区大和大路五条上る山崎町341-2ほかにあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地である六波羅政庁跡(京都市遺跡番号:540)に該当する。このため、工事に先立ち2024(令和6)年度に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「文化財保護課」という)による試掘調査(京都市番号:24S231)が行われた。その結果、平安時代から室町時代にかけての遺構・遺物が確認された。このため、文化財保護課から原因者に対し発掘調査が必要であるとの指導が行われ、原因者から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することとなった。

### (2) 調査の経過 (図2～10)

文化財保護課の指導の下、敷地東部に17m×12mの調査区を設定した。調査面積は204㎡である。調査地内で排土置き場を確保するため反転調査とし、調査区を東西に分け、東側を1区、西側

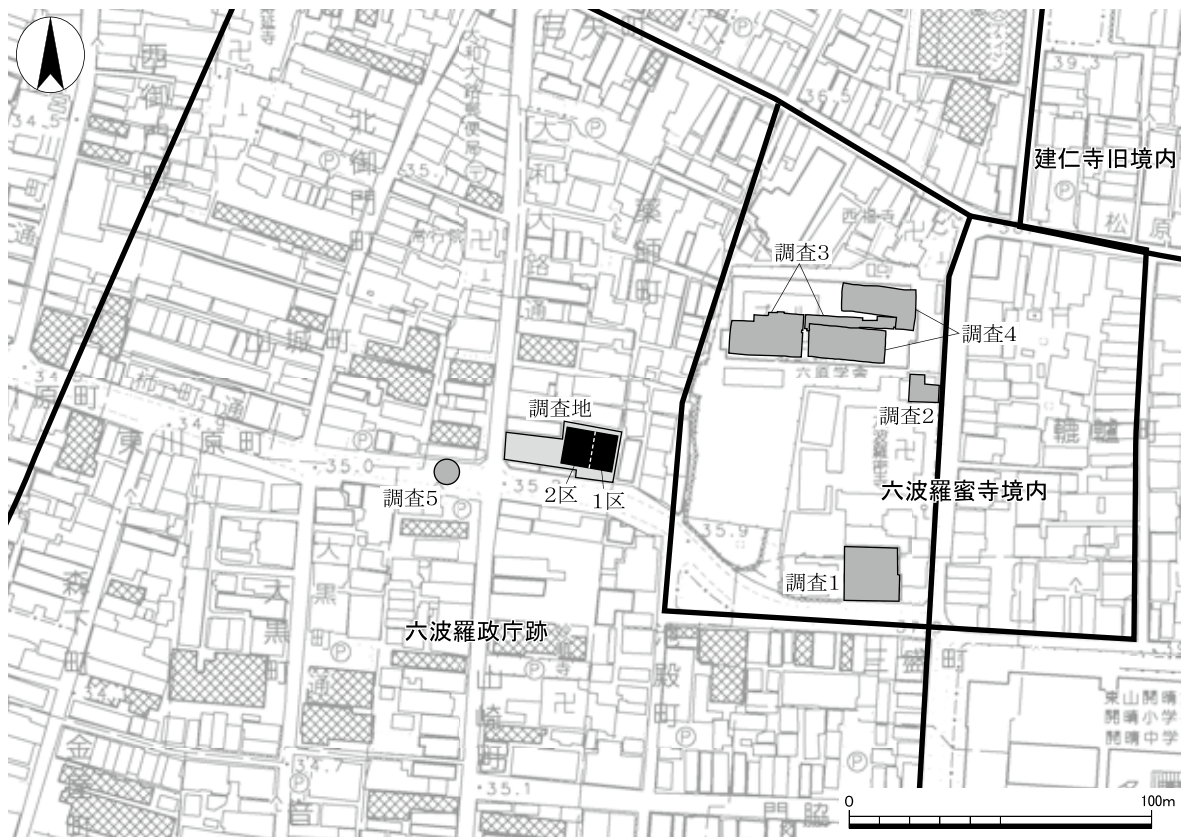


図1 調査地及び周辺調査位置図 (1:2,500)

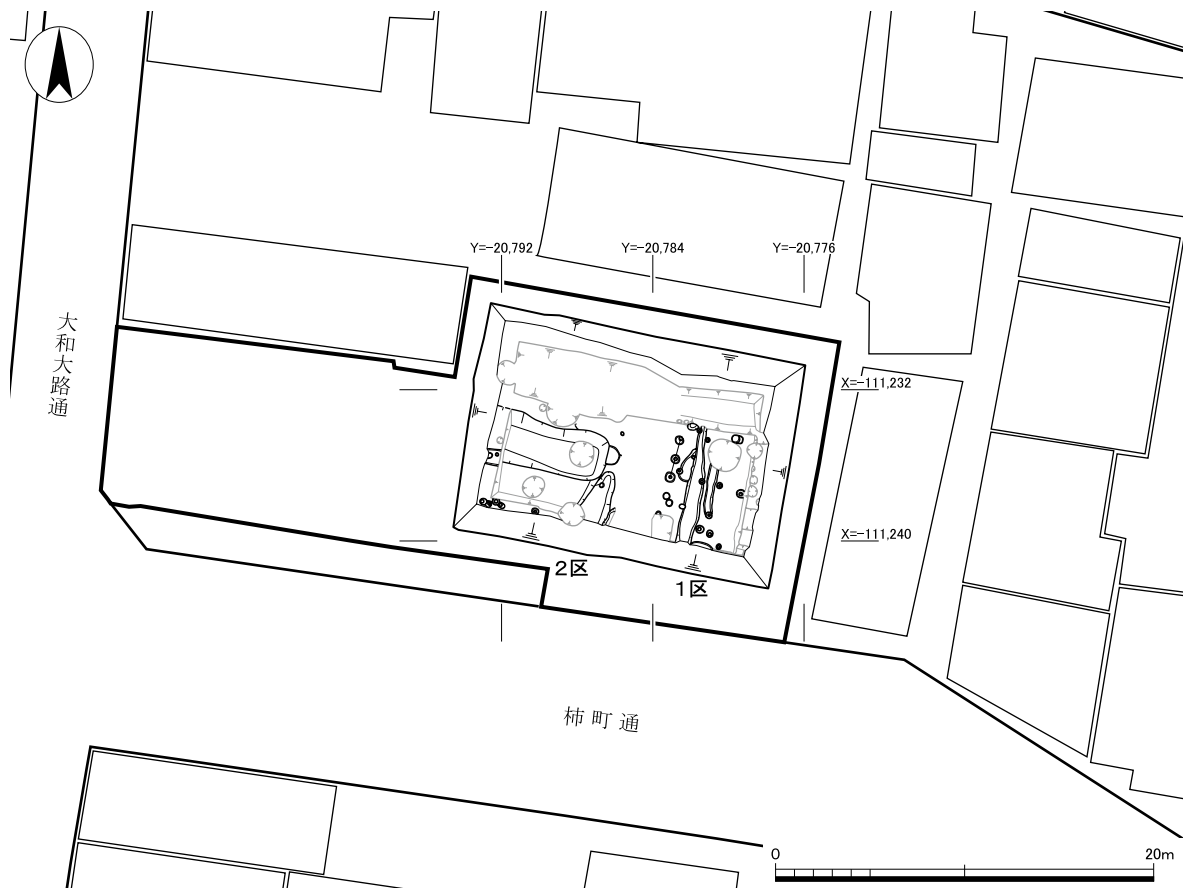


図2 調査区配置図 (1 : 400)

を2区とした。東側の1区から調査を開始し、続いて西側の2区の調査を行った。

2025年4月7日から1区の調査を開始した。5月21日に1区の調査を終了し、翌日の22日から2区への反転調査を開始した。2区の調査終了後は埋め戻しを行い、2025年7月18日には全ての作業を終了した。調査は、現代盛土から近世整地層までを重機により掘削し、地表下1.2～1.5mで室町時代の遺構面を検出した。これより下層の遺構については、第1面から第3面まで順次各遺構面で遺構検出を行い、検出した遺構は人力で掘削した。掘削後は図面作成・写真撮影などの記録作業を行った。

調査では、1区・2区ともに3面の遺構面を検出した。各遺構面の時期は、第1面が室町時代、第2面が鎌倉時代後半、第3面が鎌倉時代前半である。調査成果としては、基盤層が平安時代中期までの遺物を含む河川堆積物によって形成され、この上面で第3面の鎌倉時代の遺構が成立することを確認した。また、鎌倉時代の遺構としては溝・井戸・土坑・柱穴など、室町時代の遺構としては溝などを検出し、土地利用の実態を明らかにした。

調査中は、各調査区の各面で、適宜、文化財保護課による検査を受けた。また、検証委員である鈴木久男委員による指導を受けた。



図3 調査前全景（北東から）



図4 1区重機掘削状況（北東から）



図5 1区作業状況（南東から）



図6 2区作業状況（北西から）



図7 基準点測量作業状況（南西から）



図8 1区遺構測量作業状況（南西から）



図9 鈴木委員指導状況（南東から）



図10 2区埋戻し状況（南東から）

## 2. 位置と環境

### (1) 位置と環境

調査地が位置する清水・六波羅地区は、東山から西側の鴨川に向けての傾斜地に立地する。

調査地の周辺では、東側に位置する東山開晴館六原学舎の間が、現状では崖面となっている。六原学舎の現地表面の標高は38.6m、調査地の現地表面の標高は、高いところで35.16mと、3.5m程度の比高差がある。ただ、東山開晴館六原学舎の新築工事に伴う発掘調査によって基盤層が、現在の六波羅蜜寺境内西端付近から、西側に向かって大きく傾斜していることが確認されており、現状の崖状地形は後世に大きく改変された可能性が高いことが明らかになっている。改変された時期は、少なくとも室町時代までは遡る。いずれにしても、調査地周辺が地形の変換点にあたっているとみることができる。

調査地の東側にある東山の尾根から西麓にかけては、古墳時代以来、造墓活動が行われ、將軍塚古墳群・旭山古墳群・鳥戸野古墳群などが造られる。これらの古墳群の立地する東山西麓一帯は鳥部野と呼ばれ、特に平安時代中期以降には、西の化野、北の蓮台野とともに、平安京の葬送の地として認識されるようになる。調査地周辺には六波羅蜜寺の前身寺院である西光寺や六道珍皇寺、愛宕寺といった宗教施設、南側には葬送の地である鳥部野が位置する。こうした状況から、調査地北東部には、彼岸と此岸の境と言われている六道の辻の伝承が残る。

平安時代後期になると平正盛が六波羅に私堂を建立する。これに端を発し、以後平氏一門の拠点となっていく。平清盛の父である忠盛の時世には、大規模開発はおよんでいなかったようであるが、清盛の代になると、「屋敷五千二百余宇」（『平家物語』）とあるように、邸宅が軒を連ね、集住するような開発が進んだようである。当時、清盛の弟である平頼盛の邸宅は池殿、平教盛の邸宅は門脇殿と呼ばれていたようで、調査地南東部に残る、「池殿町」や「門脇町」といった地名から、これらの邸宅跡と推定されている。

文治元年（1185）の壇ノ浦の戦いでの平氏滅亡後は、北条時政が、平頼盛の池殿を接収して六波羅邸を築造し、源頼朝の宿所とした。承久3年（1221）には、北条泰時・時房により、北方と南方の2箇所（六波羅探題）が設けられた。北方が平氏の六波羅邸跡に相当し、本調査地も、これに該当する。

元弘3年（1333）には、足利尊氏率いる軍の攻撃によって、焼亡する。

#### 参考文献

『史料 京都の歴史 第10巻 東山区』 平凡社 1992年

## (2) 既往の調査 (図1)

調査地が位置する六波羅政庁跡の北側では、本格的な発掘調査の件数が少ない傾向にある。今回は、遺跡の様相がわかる5箇所の調査について触れる。うち調査1～4は、六波羅蜜寺境内と遺跡の範囲が重複している。

調査1では、平安時代末から鎌倉時代の柱穴や近世の土取穴が検出された。

調査2では、平安時代の包含層や土坑、古墳時代前期の流路などが検出された。

調査3と4は、調査年度が異なるものの、校舎新築に伴う一連の調査である。そのため、ここでは成果を一緒に扱うこととする。調査では、弥生時代の流路、平安時代の木棺墓・溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の柵・門・井戸・堀・溝・造成土、江戸時代から近代にかけての土坑などが検出された。下層では二次堆積のAT火山灰も確認された。

調査5は立会調査で、鎌倉時代の包含層や鎌倉時代以前の路面が検出された。

### 周辺調査文献一覧

調査1 「26-12 六波羅蜜寺遺跡」『日本考古学年報28 (1975年版)』 日本考古学協会 1977年

調査2 「六波羅政庁跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要 (発掘調査編)』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年

調査3 『六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-6 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年

調査4 『六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年

調査5 『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序 (図版4・5)

調査区は現状で、東側が標高約35.2m、西側が標高約35.0mで、東側から西側に向かってわずかに傾斜する。基本層序は、地表下0.7～1.0m程度までが近・現代盛土、以下は上から、江戸時代整地層 (厚さ0.45m、図版4 - 南壁2～4)、室町時代整地層1 (厚さ0.15m、図版4 - 南壁8、図版5 - 東壁8～14)、室町時代整地層2 (厚さ0.3m、図版4 - 南壁18・19、図版5 - 東壁53～59)、鎌倉時代整地層1 (厚さ0.2～0.25m、図版4 - 南壁31～33、図版5 - 東壁65～67)、鎌倉時代整地層2 (厚さ0.2m、図版4 - 南壁41～46、図版5 - 東壁68)、基盤層である。

第1～3面において調査を行い、各遺構面は室町時代整地層2上面を第1面、鎌倉時代整地層1上面を第2面、鎌倉時代整地層2上面を第3面とした。土層断面図には、平面では確認できなかった遺構が存在する。また、基盤層は堆積構造や鉦物組成から鴨川由来の堆積物によって形成されていることが確認できた。基盤層からは、奈良時代から平安時代中期の土器が少量だが出土しており、早くとも平安時代中期までは、鴨川の氾濫原となっていたことを確認した。

#### (2) 鎌倉時代前半の遺構 (図版1・8・9)

溝、柱穴などを検出した。

**溝190** (図版6) 調査区南西部で検出した。南側と西側は調査区外に広がるため未調査である。北側は溝180によって攪乱される。鎌倉時代整地層2上面で成立する。検出規模は南北長2.5m、東西長5.4m、深さ0.7mである。土層断面の検討の結果、南西隅部で鎌倉時代整地層2を掘り込む、L字状に屈曲する溝の肩部が確認できた。北肩については、溝180によって攪乱されるため不明だが、溝190の北肩は溝180の中に収まると想定されることから、溝190はL字状に屈曲する平面形に復元することができる。遺物は6B段階の土器類が出土した。花粉分析と寄生虫卵分析の結果、湿潤な環境であったことや、寄生虫卵が多量に含まれていることが確認でき、人の糞尿が流入していた環境が復元できる (付章1参照)。

**溝180** (図版6) 調査区南西部で検出した東西方向の溝である。東側は掘り止まり、西側は調

表1 遺構概要表

時 代	遺 構
平安時代中期以降	基盤層
鎌倉時代前半	溝180・190、柱穴列1
鎌倉時代後半	溝55・57・115・161、土坑68・104・199、井戸34、柱穴173
鎌倉時代末～ 室町時代	溝43、土坑18・33・63・121

査区外に広がる。鎌倉時代整地層2および溝190埋土を掘り込んで成立する。検出長5.5m、検出幅約2.3m、深さ0.6mである。方位は北に対して西に約80度振る。溝190が人為的に埋められた後、ほぼ重複するように掘り込まれ、標高32.5mで溝底部が平坦に連続するなど、溝190を意識して掘削したと考えられるものの、溝190のように南側には屈曲しない。遺物は6C段階の土

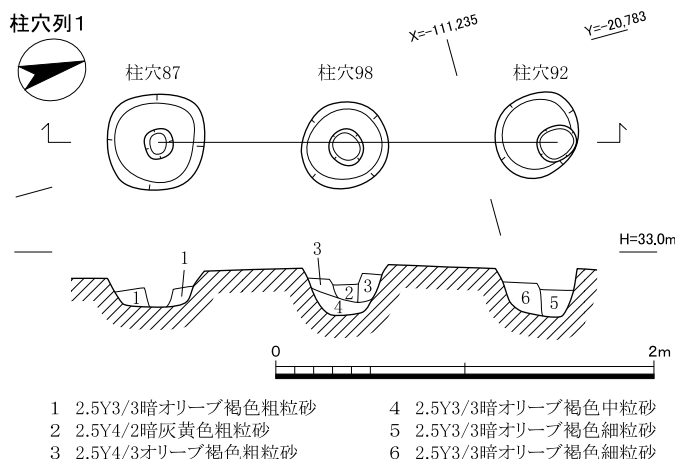


図11 柱穴列1実測図(1:40)

器類が出土した。花粉分析と寄生虫卵分析の結果、溝190に比べると少ないものの、寄生虫卵や人の食料由来と考えられる花粉が含まれていることが確認できた(付章1参照)。

柱穴列1(図11) 調査区中央部で検出した。南北方向に柱穴が3基並ぶ。掘形の平面形は円形や隅丸方形で、検出規模は直径0.5m程度である。柱間は北から1.1m、1.05mで、ほぼ等間である。深さは0.15~0.25mである。

### (3) 鎌倉時代後半の遺構(図版2・10・11)

この時期の遺構は井戸、溝、土坑、柱穴などを検出した。

溝57 調査区南東部で検出した東西方向の溝である。北肩のみを検出した。南側と東側は調査区外に広がり、西側は近世の井戸に掘り込まれる。検出長4.2m、検出幅0.7m、深さ0.3mである。埋土は、部分的に焼土を含むところがある。遺物は6C~7A段階の土器類が出土した。

溝161(図版7・11) 調査区南西部で検出した東西方向の溝である。西側は調査区外に広がる。検出長7.0m、検出幅1.0~1.4m、深さ0.25mである。遺物は6C~7A段階の土器類が出土した。

溝57と溝161は、接続部を確認することができなかったものの、延長線上に位置し、出土土器の年代も一致することから、同一の溝と考えられる。

溝55 調査区南東部で検出した東西方向の溝である。東側は調査区外に広がる。検出長5.5m、検出幅0.5m、深さ0.3mである。遺物の出土量が少なく、判断しづらいが6C~7A段階と考えられる。

溝115(図版7) 調査区南西部で検出した東西方向の溝である。西側は調査区外に広がる。検出長8.0m、検出幅0.7~0.8m、深さ0.3mである。遺物は6C~7A段階の土器類が出土した。

溝55と溝115も、接続部を確認することができなかったものの、同一の溝と考えられる。

土坑199(図版7・9) 調査区中央部の南側で検出した。南側は調査区外に広がる。調査では第3面で検出した。平面形は不定形で、検出規模は南北長2.85m、東西長1.6m、深さ0.15mである。土師器皿が多量に出土したが、小片がほとんどで、実測できる資料はわずかであった。遺物は7A段階の土器類が出土した。

土坑68 (図版11) 調査区北東部で検出した。平面形は円形で、検出規模は直径0.95 m、深さ0.4 mである。埋土には土師器皿の細片が多く含まれるが、図化できるものはなかった。遺物は7段階前半の土器類が出土した。

井戸34 (図版7・11) 調査区北東部で検出した。掘形と水溜を確認した。掘形の平面形は方形で、検出規模は一辺1.65 m、深さ1.6 mである。井戸底の標高は31.65 mである。水溜は、直径0.6 mの円形で、深さ0.4 mで、木製の曲物が据えられる。曲物自体の残存状態は悪く、取り上げることはできなかった。井戸枠を確認することはできなかったものの、本来は木製の井戸枠が方形に組まれていたと考えられる。遺物は13世紀後半の土器類が出土した。

#### (4) 鎌倉時代末から室町時代の遺構 (図版3・12~14)

この時期の遺構は溝、土坑などを検出した。

土坑121 (図版7) 調査区南西部で検出した。北側は近世の井戸に掘り込まれ、南側は調査区外に広がる。平面形は円形で、検出規模は直径1.95 m、深さ0.25 mである。遺物は7段階前半の土器類が出土し、鎌倉時代後半の様相を示すが、室町時代整地層2上面で成立することから、この時期の遺構であると判断した。

土坑63 (図版14、図12) 調査区南東隅部で検出した。東側は調査区外に広がる。平面形は東西に長い長方形で、検出規模は南北長0.8 m、東西長1.4 m、深さ0.5 mである。土師器皿がまとまって出土した。遺物は7 C段階の土器類が出土した。

土坑33 (図版14、図12) 調査区南東部で検出した。東側は土坑18によって掘り込まれる。平面形は楕円形で、検出規模は南北長0.9 m、東西長0.9 m、深さ0.15 mである。土師器皿がまとまっ

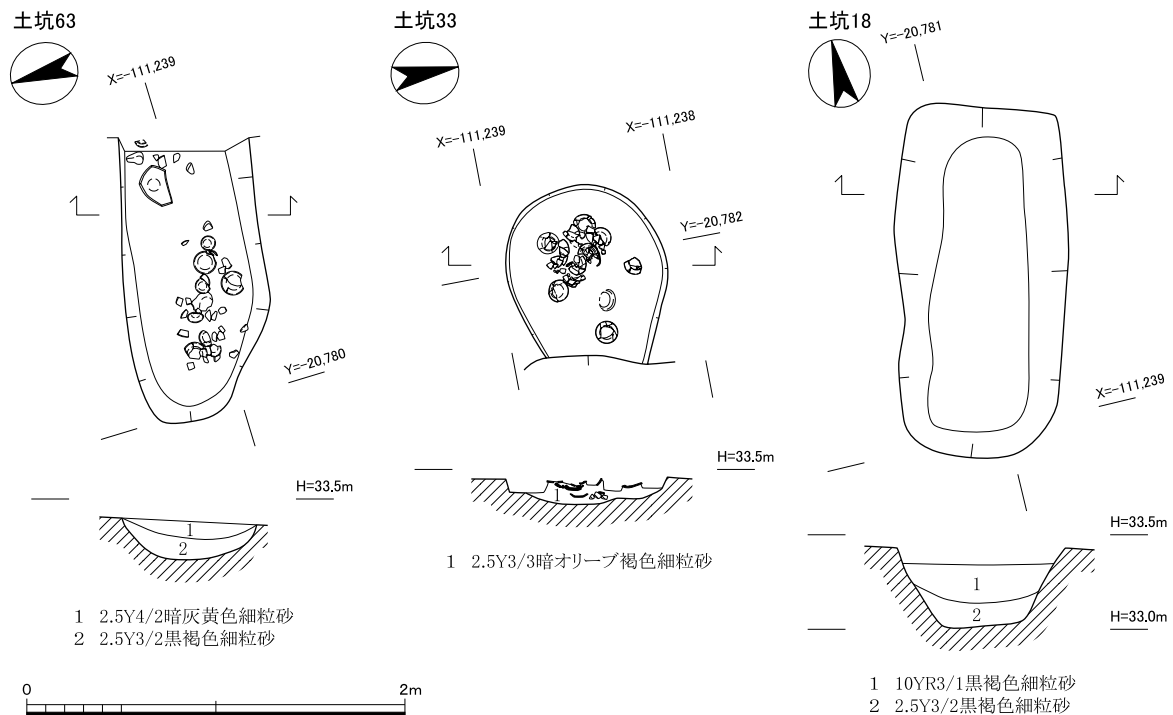
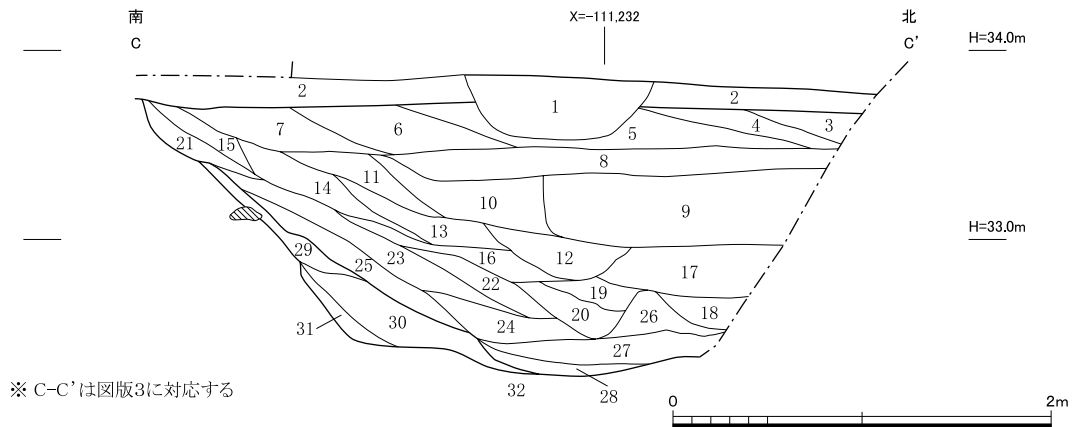


図12 土坑63・33・18実測図 (1:40)

て出土した。遺物は7C段階の土器類が出土した。

**土坑18** 調査区南東部で検出した。平面形は南北に長い長方形で、検出規模は南北長1.9m、東西長0.9m、深さ0.4mである。遺物は9段階の土器類と14世紀中頃の土器が共伴して出土した。

**溝43** (図13) 調査区北部で検出した東西方向の溝である。南肩のみを検出し、北・東・西側は調査区外に広がる。そのため溝の幅は確認できていない。断面形は逆台形状で、底部は平坦である。検出長約15m、検出幅3.3~4.2m、深さ1.1~1.45mである。底部の標高は東側が約32.5m、西側が約32.3mと、東側から西側に向かって低くなる。方位は北に対して西に約80度振る。溝埋土は大きく4層に分けることができる。肩口から底部にかけて図13-29~31層が堆積し、底部に機能時の水性堆積と考えられる粘土層(図13-28層)が堆積する。図13-26・27層も28層と同様の性格と考えられるが、後の埋戻し土による影響を受け、変形している。図13-9~25層は一連の作業で、礫層と砂礫層を使い分けながら丁寧に埋め戻される。部分的に粘土が使用される層(図13-14層)や礫層(図13-9層)もある。9層より上層は、比較的精良な土を使って、室町時代整地層1上面まで一連で積み上げており、溝43は室町時代整地層1を整備するにあたって埋め戻されたと考えられる。遺物の大部分は25層より上層の埋土から出土し、後述する有孔磚なども基本的には、この層位から出土した。9層の礫層からは焼締陶器片が多量に出土したが、礫とともに埋め材として利用されたものと考えられる。遺物は、15世紀前半以前の土器類が出土した。花粉分析と寄生虫卵分析の結果、溝190に比べると少ないものの、寄生虫卵や人の食料由来と考えられる花粉が含まれていることが確認できた(付章1参照)。



- |  |                                       |
|--|---------------------------------------|
| 1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂 φ12cmまでの礫少量混              | 17 2.5Y3/1黒褐色中砂混じり粘土 φ10cmまでの礫多量混     |
| 2 2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂 φ5cmまでの礫極少量混<br>(室町時代整地層1) | 18 2.5Y3/1黒褐色細砂混じり粘土 φ20cmまでの礫多量混     |
| 3 2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂 φ7cmまでの礫極少量混               | 19 2.5Y3/1黒褐色細砂混じり粘土 φ20cmまでの礫多量混     |
| 4 2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂 φ7cmまでの礫極少量混               | 20 2.5Y3/2黒褐色細砂混じり粘土 φ20cmまでの礫少量混     |
| 5 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂 φ4cmまでの礫極少量混                 | 21 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂 φ15cmまでの礫多量混    |
| 6 2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂 φ7cmまでの礫極少量混               | 22 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粗砂 φ15cmまでの礫多量混      |
| 7 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂 φ7cmまでの礫少量混                  | 23 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂 φ10cmまでの礫少量混       |
| 8 2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂 φ2cmまでの礫極少量混               | 24 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂混じりシルト φ10cmまでの礫少量混 |
| 9 2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂 φ15cmまでの礫極多量混              | 25 2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂 φ10cmまでの礫多量混     |
| 10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂 φ15cmまでの礫少量混             | 26 2.5Y3/2黒褐色粘土                       |
| 11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂 φ3cmまでの礫少量混              | 27 2.5Y2/1黒色粘土 φ5cmまでの礫少量混            |
| 12 2.5Y3/2黒褐色極細粒砂 φ3cmまでの礫中量混                  | 28 2.5Y3/1黒褐色粘土                       |
| 13 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂 φ10cmまでの礫多量混             | 29 2.5Y3/3暗オリーブ褐色中砂~細砂 φ1cmまでの礫少量混    |
| 14 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂混じり粘土 φ5cmまでの礫少量混           | 30 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂 φ4cmまでの礫中量混        |
| 15 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂 φ5cmまでの礫中量混              | 31 2.5Y3/3暗オリーブ褐色中砂~細砂 φ3cmまでの礫少量混    |
| 16 2.5Y3/2黒褐色極細粒砂 φ6cmまでの礫多量混                  | 32 7.5YR4/3褐色砂礫(基盤層)                  |

図13 溝43断面図(1:40)

## 4. 遺 物

### (1) 遺物の概要

調査では整理コンテナにして77箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品などがある。出土遺物の大部分は土器類が占め、その他の種類は少ない。時代別では、鎌倉時代から室町時代のもが多く、平安時代中期以前の土器類がわずかに出土した。

以下では主要な遺構から出土した遺物について種類ごとに概要を述べる。遺物の時期の表記は、土師器は平尾氏の土器編年案<sup>1)</sup>を準用する。

### (2) 土器類

#### 鎌倉時代前半の土器 (図14、図版15)

溝190出土土器 (1～4) 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。土師器には皿S (1～4) がある。皿Sは口径10.8cm、器高3.3cm (1) と口径12.6～13.0cm、器高2.9～3.4cm (2～4) の2群がある。時期は6B段階に属する。

溝180出土土器 (5～18) 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。土師器には皿N (5～10)、皿S (11～18) がある。皿Nは口径8.0～9.3cm、器高1.2～1.6cm (5～8) と口径11.6cm、器高2.1cm (9・10) の2群がある。皿Sは口径7.5～7.8cm、器高1.4～1.7cm (11・12) と口径10.9～13.3cm、器高2.8～3.1cm (13～18) の2群がある。時期は6C段階に属する。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
奈良時代	須恵器				
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦		瓦8点		
鎌倉時代前半	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦		土師器18点、瓦1点		
鎌倉時代後半	土師器、須恵器、灰釉系陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、金属製品、石製品		土師器31点、須恵器3点、瓦器7点、焼締陶器1点、輸入陶磁器2点、石製品1点、銭貨6点		
鎌倉時代末～室町時代	土師器、須恵器、灰釉系陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、土製品、石製品、金属製品、骨		土師器30点、須恵器6点、瓦器1点、施釉陶器12点、焼締陶器27点、土製品17点、石製品3点、金属製品1点、骨1点		
合計		92箱	176点 (12箱)	0箱	80箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より15箱多くなっている。

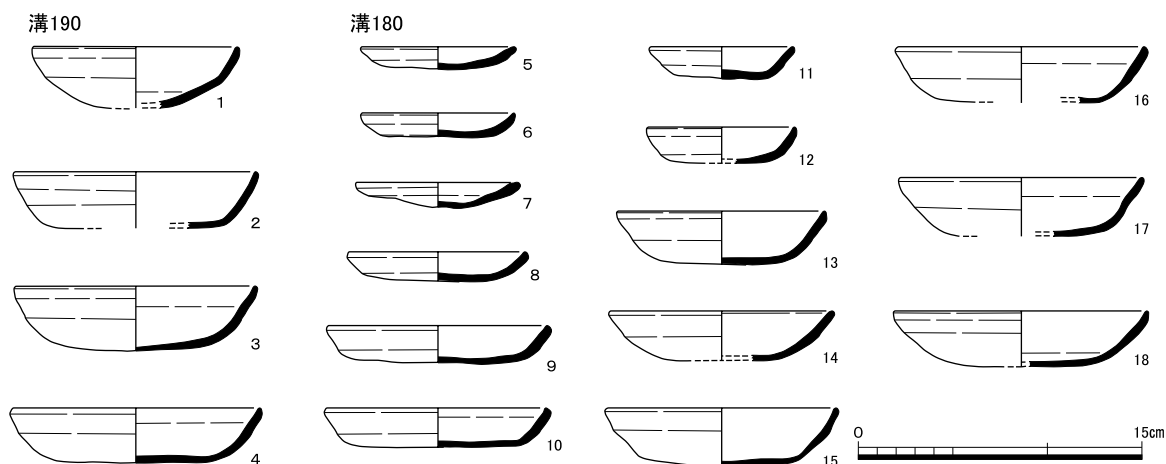


図14 溝180・190出土土器実測図（1：4）

### 鎌倉時代後半の土器（図15、図版15）

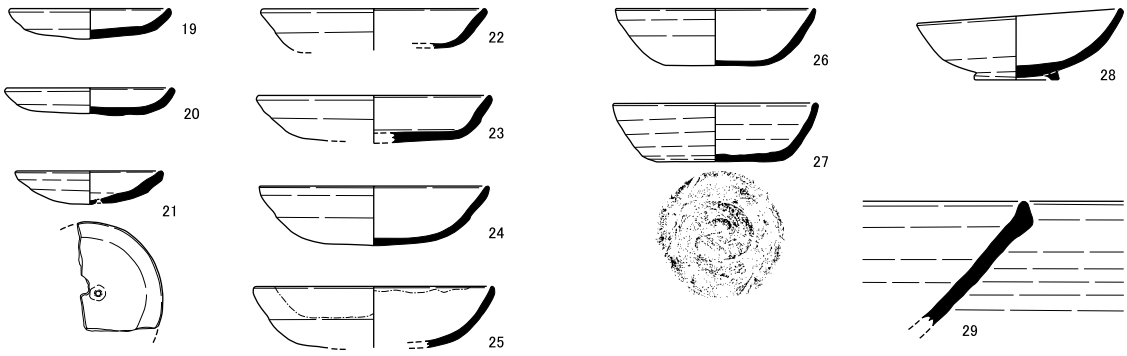
**溝57出土土器（19～29）** 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。土師器には皿N（19～23）、皿S（24～26）、ロクロ成形の皿（27）、椀（28）がある。皿Nは口径7.7～8.7cm、器高1.5～1.8cm（19～21）と口径11.8～12.2cm、器高2.2～2.5cm（22～23）の2群がある。21は底部中央に直径2mm程度の円孔が1箇所にある。皿Sは口径10.4cm、器高3.0cm（26）と口径12.0～12.6cm、器高3.2cm（24・25）の2群がある。ロクロ成形の皿（27）は底部外面に糸切り痕が残るが、大きさや形状は京都系土師器皿（26）と似ている。28は高台付の椀である。高台は貼付け高台である。27と28は瀬戸内海地域からの搬入品と見られる。29は東播系須恵器の鉢である。口縁部外面には暗色帯がある。時期は6C～7A段階に属する。

**溝161出土土器（30～43）** 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。土師器には皿N（30・31）、皿Sc（32・33）、皿S（34～39）、ミニチュア羽釜（40）がある。皿Nは口径8.4～9.2cm、器高1.4cm（30・31）である。皿Scは口径3.9～4.3cm、器高0.7～0.9cm（32・33）である。皿Sは口径7.2～8.0cm、器高1.8～2.1cm（34～36）と口径10.4～12.2cm、器高2.9～3.2cm（37～39）の2群がある。41は東播系須恵器の鉢である。口縁部外面には暗色帯がある。底部内面はあまり平滑ではない。瓦器には鍋（42）、羽釜（43）がある。ともに口縁部から体部外面は黒色で内面は灰色を呈する。時期は6C～7A段階に属する。

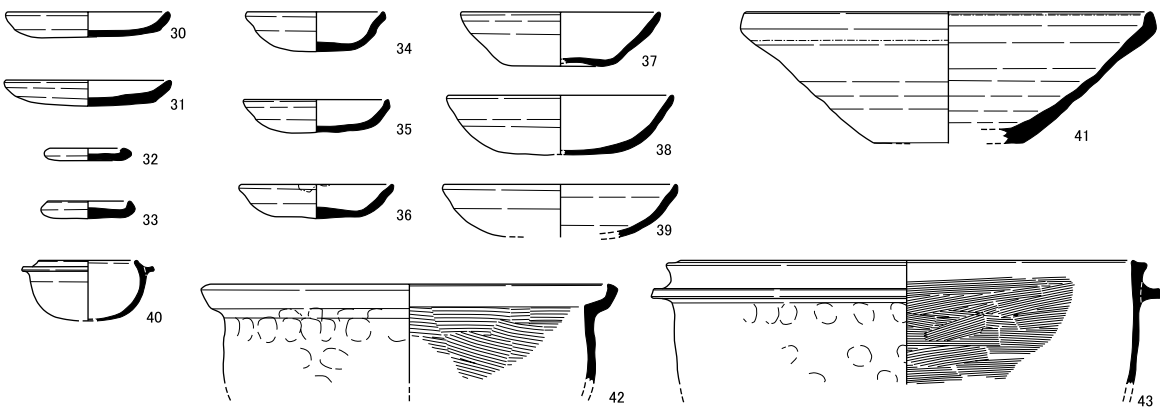
**土坑199出土土器（44～49）** 土師器・石製品などが出土した。土師器には皿Sc（44）、皿S（45～49）がある。皿Scは口径4.3cm、器高0.8cm（44）である。皿Sは口径6.7～7.6cm、器高2.1～3.2cm（45～47）と口径11.8cm、器高2.9cm（48）の2群がある。時期は7A段階に属する。

**土坑121出土土器（50～57）** 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦などが出土した。土師器には皿N（50）、皿S（51・52）、ロクロ成形の皿（53）がある。皿Nは口径12.0cm、器高2.2cm（50）である。皿Sは口径12.0～12.4cm、器高2.7～3.5cm（51・52）である。ロクロ成形の皿（53）は口径7.4cm、器高1.0cmである。底部内面にはナデが強く残り、底部外面には糸切り痕が良好に残る。他地域からの搬入品と考えられる。瓦器には甕（54）、ミニチュア三足羽釜（55）、鍋（56）、羽釜（57）がある。甕（54）は内外面ともに黒色を呈する。ミニチュア三足羽釜（55）

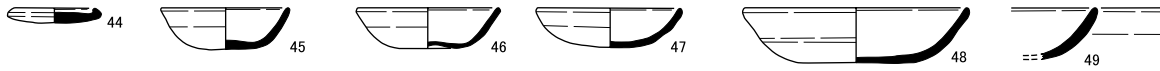
溝57



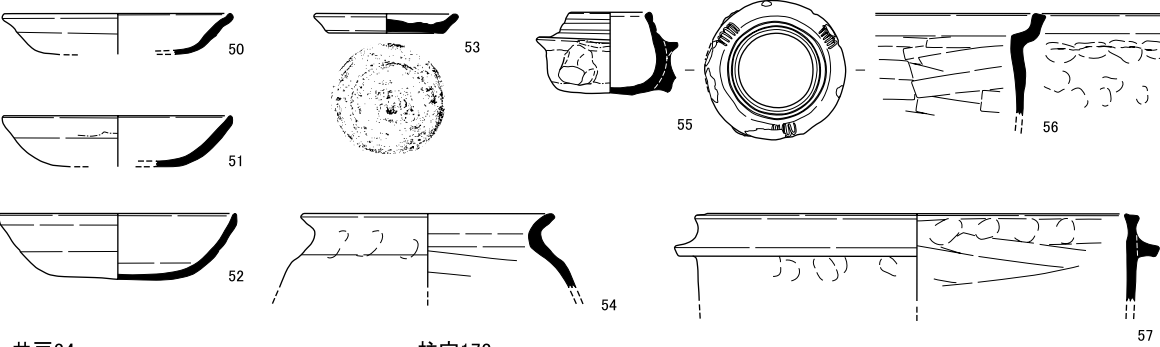
溝161



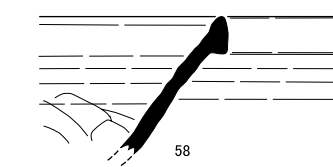
土坑199



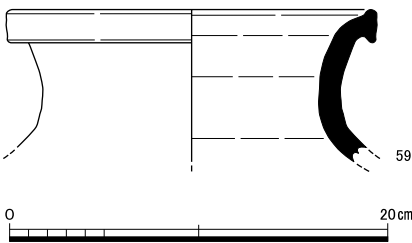
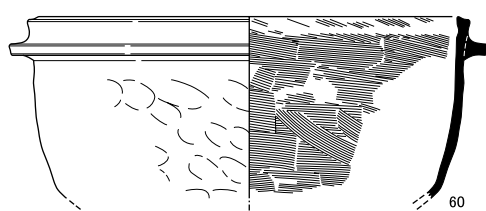
土坑121



井戸34



柱穴173



鎌倉時代整地層1

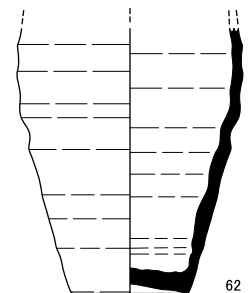
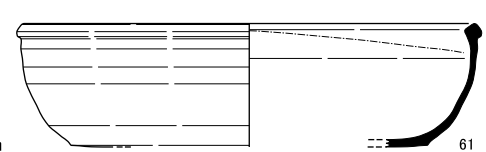


图15 溝57・161、土坑199・121、井戸34、柱穴173、鎌倉時代整地層1出土土器実測図(1:4)

は内外面ともに黒色を呈する。鏝上面に「m」字状を連ねた文様を3箇所ミガキで表現する。底部外面には煤が付着する。鍋(56)は口縁部外面から内面が黒色を呈する。羽釜(57)は口縁部外面から鏝部下面が黒色で、これ以外は灰色を呈する。時期は7A～B段階に属する。

**井戸34出土土器(58・59)** 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦などが出土した。58は東播系須恵器の鉢である。口縁部外面のみが釉により暗灰色を呈する。59は焼締陶器の壺である。時期は13世紀後半に属する。

**柱穴173出土土器(60)** 土師器、瓦器が出土した。60は瓦器の羽釜である。口縁部から鏝部上面までは黒色で、鏝部下半から体部にかけては、にぶい赤褐色、内面は灰色を呈する。

**鎌倉時代整地層1出土土器(61・62)** 61と62は鎌倉時代整地層1掘下げで出土した。61は黄釉褐彩陶器の盤である。底部内面に文様が描かれるが、部分的な残りのため、文様の全体形は不明。62は褐釉の壺と考えられる。体部対外面にナデの痕が強く残る。現状では、体部と底部外面は無釉で、内面に褐釉が良好に残る。

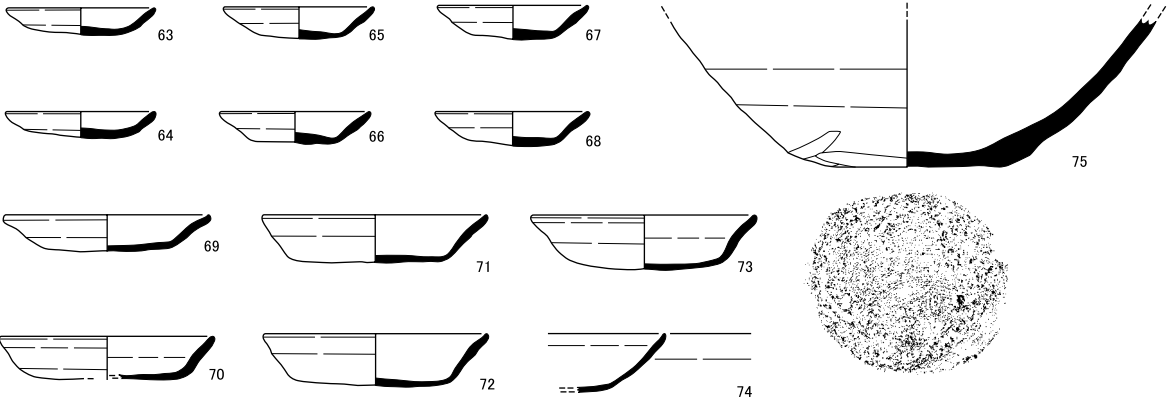
#### **鎌倉時代末から室町時代の土器(図16～18、図版15・16)**

**土坑63出土土器(63～75)** 土師器、須恵器などが出土した。土師器には皿N(63～73)、皿S(74)がある。皿Nは口径7.8～8.0cm、器高1.4～1.8cm(63～68)と口径10.8～11.8cm、器高1.9～2.9cm(69～73)の2群がある。皿S(74)は体部が緩やかに膨らむ。75は東播系須恵器の鉢である。体部下半から底部にかけての内面は器壁が荒れており、使用による痕跡と考えられる。底部外面には糸切り痕が残る。時期は7C段階に属する。

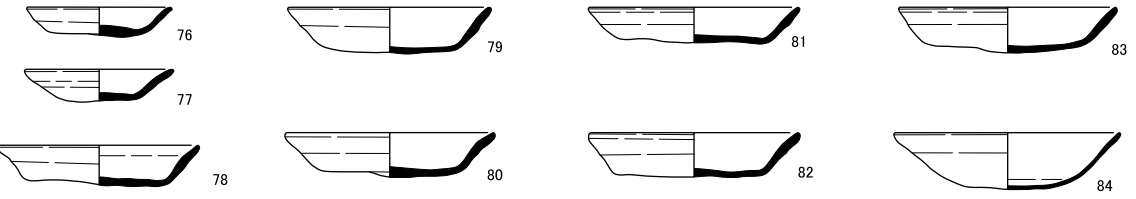
**土坑33出土土器(76～84)** 土師器、瓦器が出土した。土師器には皿N(76～83)、皿S(84)がある。皿Nは口径7.6～7.8cm、器高1.6～1.7cm(76・77)と口径10.5～11.4cm、器高1.9～2.5cm(78～83)の2群がある。皿Sは口径11.9cm、器高3.0cm(84)である。時期は7C段階に属する。

**土坑18出土土器(85～93)** 土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦器・焼締陶器、瓦などが出土した。土師器には皿N(85)、皿S(86・87)、鉢(88)がある。皿Nは口径11.2cm、器高2.3cm(85)である。皿Sは口径7.6cm、器高2.1cm(86)と口径12.6cm、器高2.9cm(87)の2群がある。鉢(88)は底径4.6cm、残存高10.2cmである。内外面に接合痕が良好に残る。ヘラ状工具によると考えられるナデの痕が接合痕と直交して残る。須恵器には甕(89)と鉢(90)がある。甕(89)は口縁部上面がヨコナデにより、わずかに窪む。体部外面に平行タタキ目が施されるが、平行タタキ目が交差して格子状となる。東播系須恵器の鉢(90)は、口径29.4cm、器高13.4cm、底径10.4cmである。口縁部外面のみが釉により黒灰色を呈する。体部下半から底部にかけての内面は器壁が荒れており、使用による痕跡と考えられる。底部外面には糸切り痕が残る。瓦器には火鉢(91)がある。復元口径42.4cm、器高11.0cmである。1箇所に脚の痕跡が残る。内外面ともにミガキが丁寧に施される。焼締陶器には壺(92)と播鉢(93)がある。備前焼の壺(92)は、内外面ともに暗赤褐色で、口縁部は玉縁を呈する。備前焼の播鉢(93)は、内面が降灰釉でオリブ黄色、外面が明るい褐色を呈する。播り目は7条で、幅2.3cm程度である。時期は土師器皿(85)や瓦器火鉢(91)から9段階と考えられるが、これ以外の遺物は古手の様相を示す。

土坑63



土坑33



土坑18

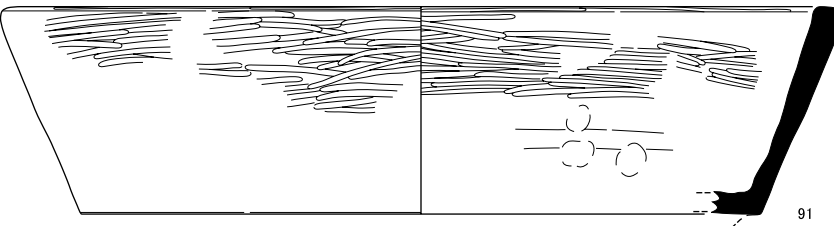
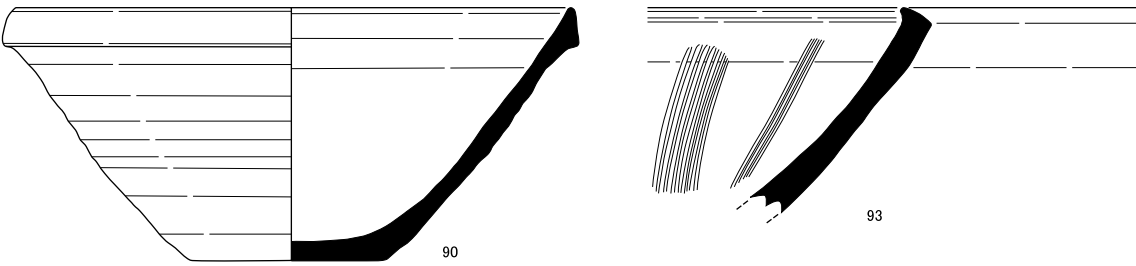
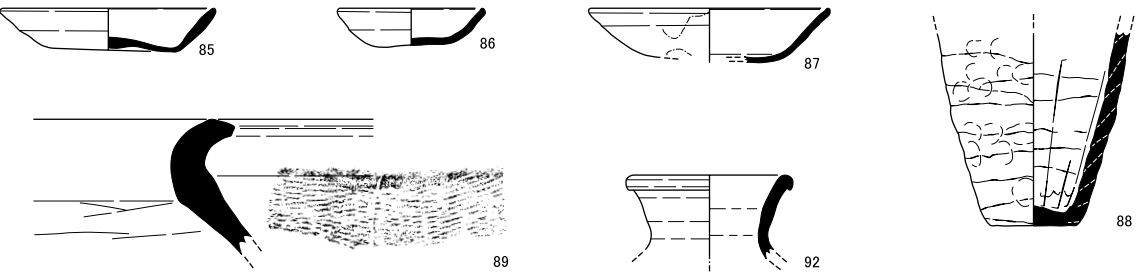


图16 土坑63·33·18出土土器实测图(1:4)

溝43出土土器 (94～138) 土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦が出土した。土師器には皿S (94～98) がある。皿Sh (94) は口径6.8cm、器高2.0cmである。98は皿Sp系列である。

施釉陶器には瀬戸美濃系の卸皿 (99～102)、深皿 (103)、天目椀 (104)、鉢 (105)、花瓶 (106)、香炉 (107)、柄付片口 (108)、椀 (109)、皿 (110) がある。卸皿 (101・102) の底部外面には糸切り痕が明瞭に残り、102には「×」字状のヘラ記号がある。天目椀 (104) は鉄釉である。鉢 (105) は、ほぼ全面に施釉する。底部外面には糸切り痕が残る、粘土が粒状に付着する。花瓶 (106) は、底部外面に糸切り痕が残る。体部から脚部外面にかけて、暗オリーブ褐色の釉を施す。香炉 (107) は、平底で粘土を貼付けて脚部とする。底部外面に糸切り痕が残る。体部外面にはオリーブ黄色の釉が施される。椀 (109) は、貼付け高台で、底部外面には糸切り痕が残る。皿 (110) は、胎土が灰色で、緑色の釉が施される。

須恵器には甕 (111) と鉢 (112・113) がある。甕 (111) の頸部は「く」の字状に強く屈曲する。体部外面と口縁部下面に格子目のタタキが施される。口縁部下面はナデによってわずかに残る程度である。体部内面にはハケ目が施される。亀山焼ないしは勝間田焼産と考えられる。112・113

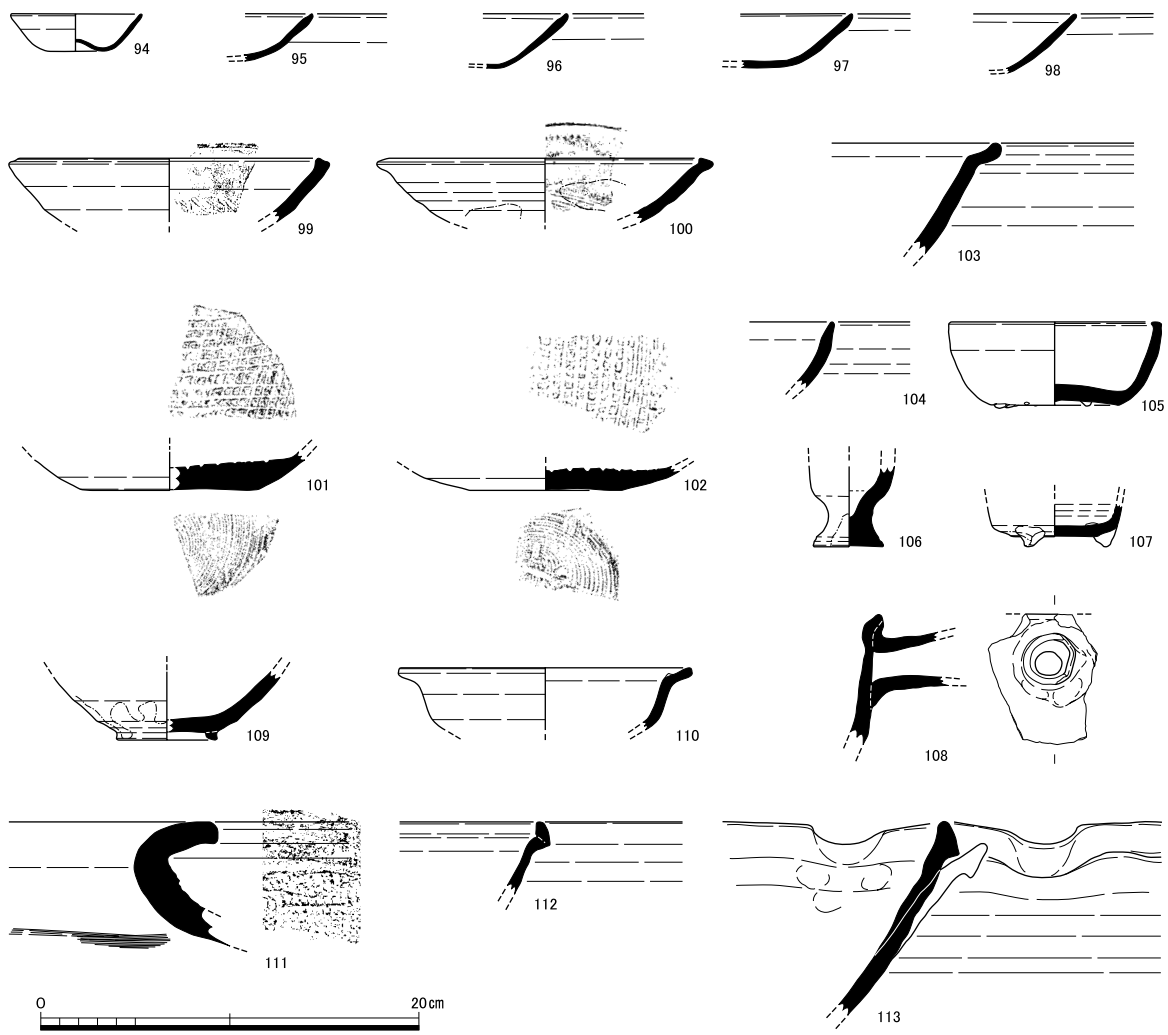


図17 溝43出土土器実測図1 (1 : 4)

は東播系須恵器の鉢である。口縁部外面のみが釉により黒灰色を呈する。

焼締陶器には壺・甕 (114～132) と播鉢 (133～138) がある。壺・甕は114が東海系である。口縁端部は面取りされる。体部外面は暗オリーブ色の釉が施され、内面は灰色を呈する。胎土の色調は黄灰色を呈し、0.2cm以上の砂粒を含まない精良な胎土である。115～128は常滑焼系で、口縁部の形態から、およそ13世紀から15世紀前半と時期幅のある資料が出土した。129～132は備前焼系である。口縁部は玉縁状を呈する。色調は全て暗赤褐色を呈する。

播鉢は133～136が備前焼系である。播り目は、133が6条以上、134が8条で、幅2.3cm、135が

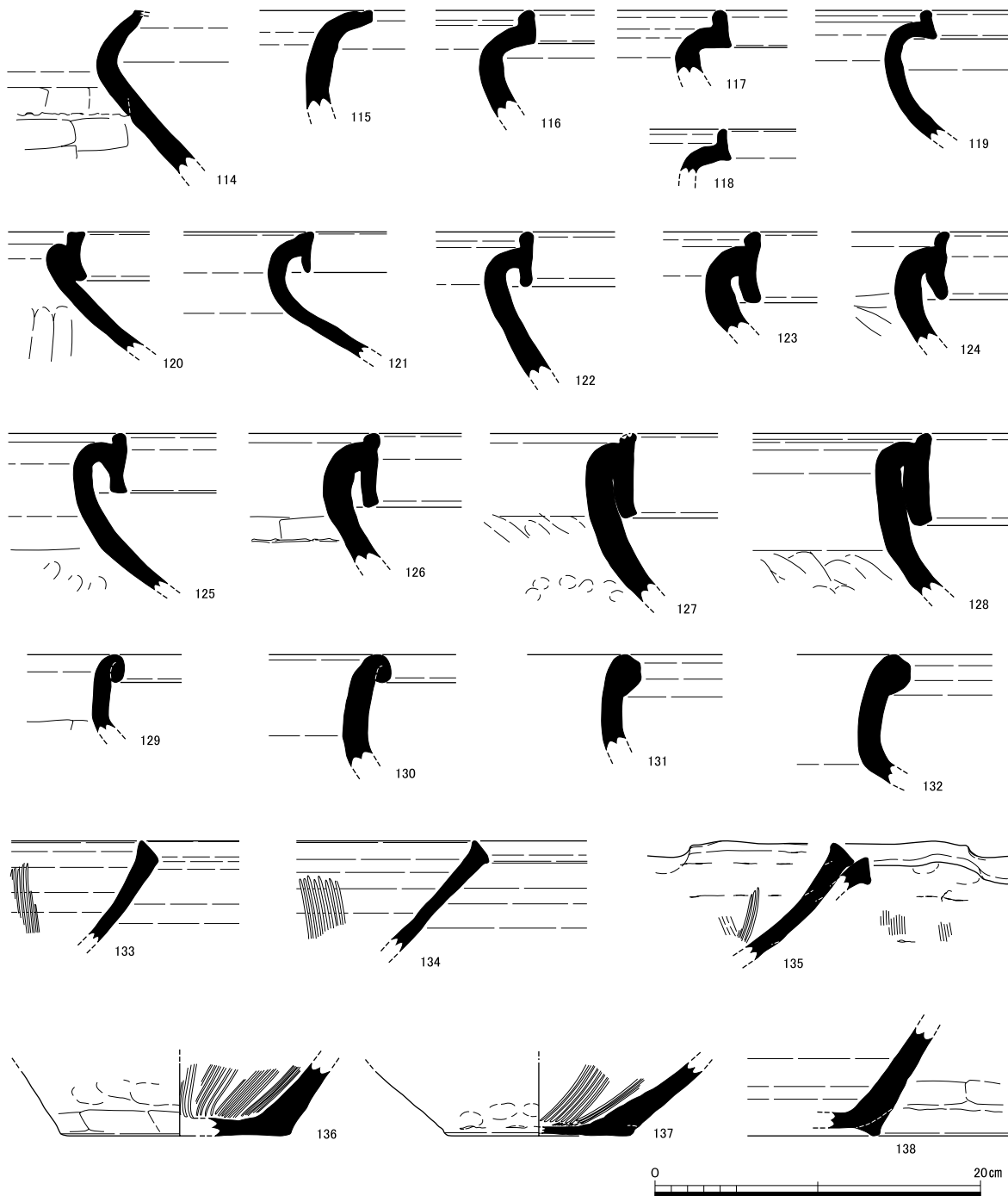


図18 溝43出土土器実測図2 (1 : 4)

3条で、幅0.5cm、136が5条で、幅1.4cmである。136の体部下端には横方向のケズリが施され、底部内面は平滑で、使用時の痕跡と考えられる。色調は133が黄褐色、134と136が赤褐色、135が暗灰色を呈する。137は産地の判断が難しいが、候補としては丹波焼系の可能性が挙げられる。底部が0.4cm程度と薄い。播り目は、底部内面にも施され、一単位7条で、幅2.0cmである。色調は暗灰色を呈する。138は常滑焼系である。高台は貼付けによる。底部内面は平滑で、使用時の痕跡と考えられる。色調は赤褐色を呈する。

時期は、出土遺物のうち焼締陶器127・128が最も新しいと捉え、埋没時期は15世紀前半以降と考えられる。掘削時期は、不明瞭ではあるものの、出土土器や遺構成立面の時期を踏まえると14世紀後半以降と考えられる。

### (3) 瓦類 (図19)

瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。出土した瓦の時期は、主に平安時代後期から鎌倉時代にかけてである。溝43からは丸瓦・平瓦がコンテナ2箱程度出土したが、他にまとまって出土した遺構は確認できなかった。

軒丸瓦 (瓦1・2) 瓦1は巴文軒丸瓦である。溝57から出土した。右巻三巴文で、尾部は長く伸び、界線状となる。外区には珠文、珠文の外側には一条の圈線が廻る。瓦当裏面はナデ調整である。焼成は軟質で、色調は外面・断面ともに灰色である。山城産。

瓦2は巴文軒丸瓦である。溝43から出土した。左巻巴文で、尾端部は界線と独立する。外区には珠文が配置される。扁平な珠文の上に、立体的珠文が重なり、範ズレによるものと考えられる。瓦当裏面はナデ調整である。焼成は軟質で、色調は外面が黒灰色、断面は灰色である。山城産。

軒平瓦 (瓦3～9) 瓦3は唐草文軒平瓦である。土坑111から出土した。瓦当上端は面取りされる。瓦当顎部から裏面は横方向のナデを施す。平瓦凹面には布目が残る。焼成は軟質で、色調は

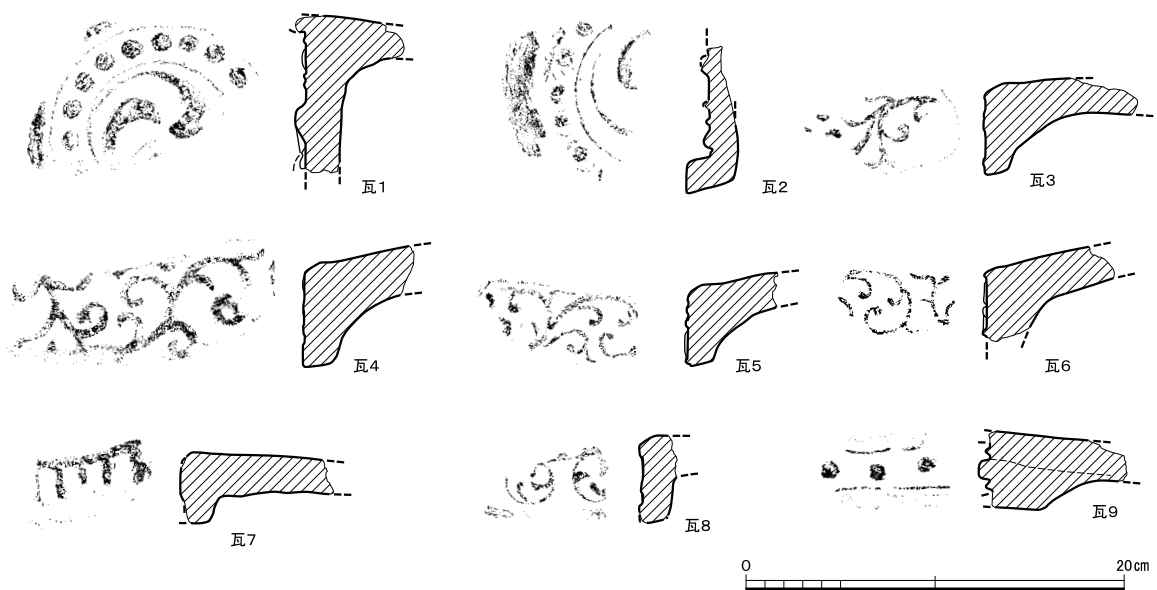


図19 瓦類拓影及び実測図 (1 : 4)

外面が黒灰色、断面は灰色である。平安時代後期。山城産。

瓦4は唐草文軒平瓦である。江戸時代の井戸125から出土した。瓦当部は顎貼付成形による。瓦当面には横方向の範キズが残る。瓦当顎部から裏面は横方向のナデを施す。平瓦凹面には布目が残る。焼成は軟質で、色調は外面が黒灰色、断面は灰色である。平安時代後期。山城産。

瓦5は唐草文軒平瓦である。鎌倉時代整地層から出土した。瓦当部は半折曲成形による。瓦当上端は面取りされる。瓦当顎部から裏面は横方向のナデを施す。平瓦凹面には布目が残る。焼成は軟質で、色調は外面・断面ともに灰色である。平安時代後期。山城産。

瓦6は唐草文軒平瓦である。溝180から出土した。瓦当部は半折曲成形による。瓦当裏面は横方向のナデを施す。平瓦凹面には布目が残る。焼成はやや軟質で、色調は外面が黒灰色、断面は灰色である。平安時代後期。山城産。

瓦7は剣頭文軒平瓦である。溝43から出土した。瓦当部は折曲成形による。瓦当裏面は横方向のナデを施す。平瓦凹面には粗い布目が残る。焼成は軟質で、色調は外面・断面ともに灰黄色である。平安時代後期。山城産。

瓦8は連巴文軒平瓦である。溝43から出土した。瓦当部は折曲成形による。瓦当顎部から瓦当裏面は横方向のナデを施す。平瓦凹面には布目が残る。焼成は軟質で、色調は外面・断面ともに灰色である。平安時代後期。山城産。

瓦9は連珠文軒平瓦である。溝43から出土した。瓦当部は顎貼付成形による。瓦当顎部は横方向のナデ、瓦当顎裏面は縦方向のナデを施す。平瓦凹面に布目は残らない。焼成はやや軟質で、色調は外面・断面ともに赤褐色で、二次被熱を受ける。鎌倉時代。和泉産。

#### (4) 土製品 (図20・21、図版17・18)

土製品には埴、壁土があり、主に溝43から出土した。

埴(土1～13) 多数の破片が出土しており、土坑23出土の1点を除き、残りは全て溝43から出土した。平面形が長方形で円形の孔がある、いわゆる「有孔埴」(土1～8)と、板状の埴(土9～13)の2種類がある。有孔埴の出土点数は41点、総重量は約21.8kgで、うち8点を報告する。板状の埴の出土点数は12点で、総重量は約1.16kgで、うち5点を報告する。これらは瓦質焼成のもので、表面・断面ともに主に黒色・灰色・明黄褐色の3種類の色調がある。基本的には上下面および側面の全面に縄目痕を残すが、一部の個体には上下面のいずれかで縄目痕が見られないものもある。

土1～8は有孔埴である。いずれも厚手で、平面形が長方形を呈する。上下面が窪む形状で、横断面形は「H」字状となる。表面には縄目痕が残り、2箇所孔がある。今回の出土品を検討すると短辺の長さから、11cm前後と13cm後半代の大きく2群に分けることができる。報告する上で便宜上、11cm前後のまとまりを1群、13cm後半代のまとまりを2群としておく。ただ、11cm後半代の個体も存在し、先の群とは別のまとまりとして捉えることができるかもしれないが、点数が少なく、出土資料のみからでは判断し難い。

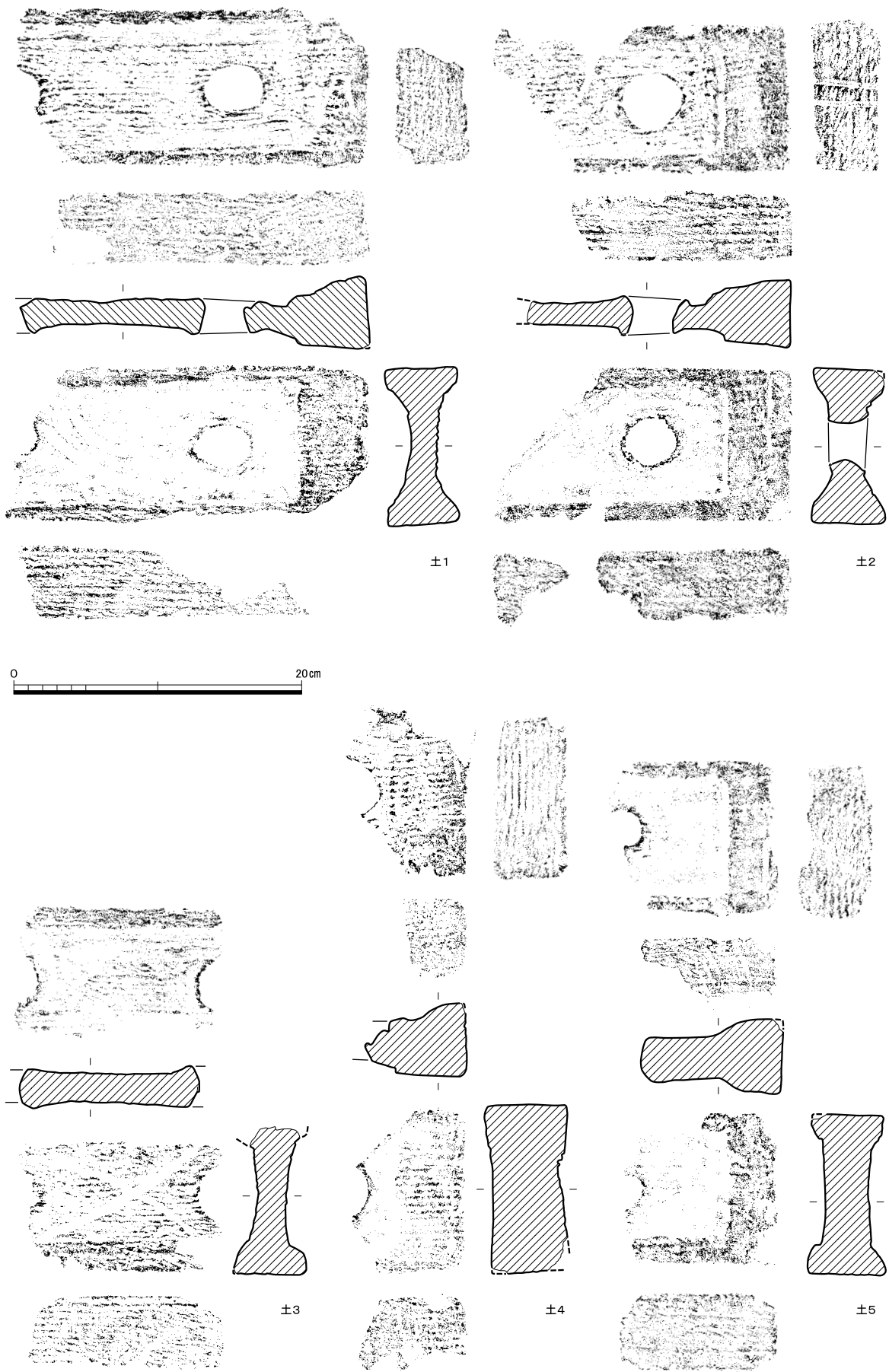


図20 土製品拓影及び実測図1 (1 : 4)

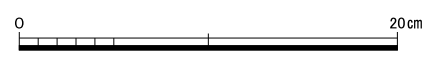
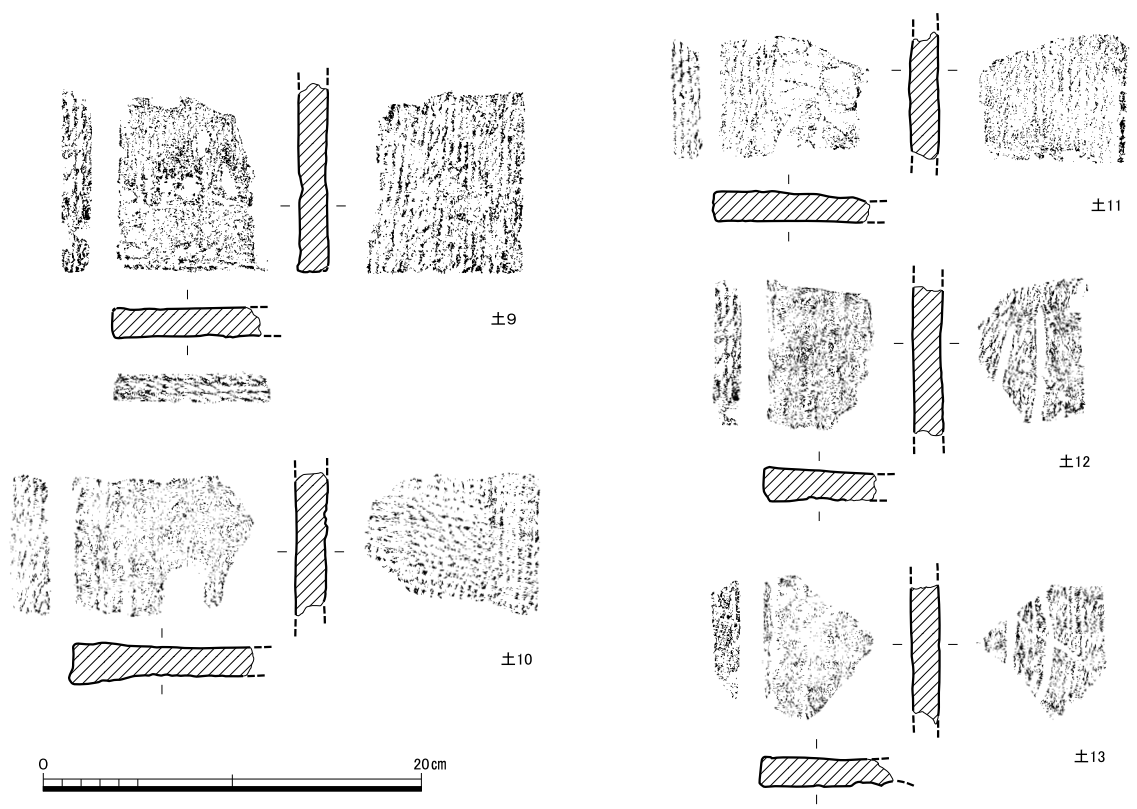
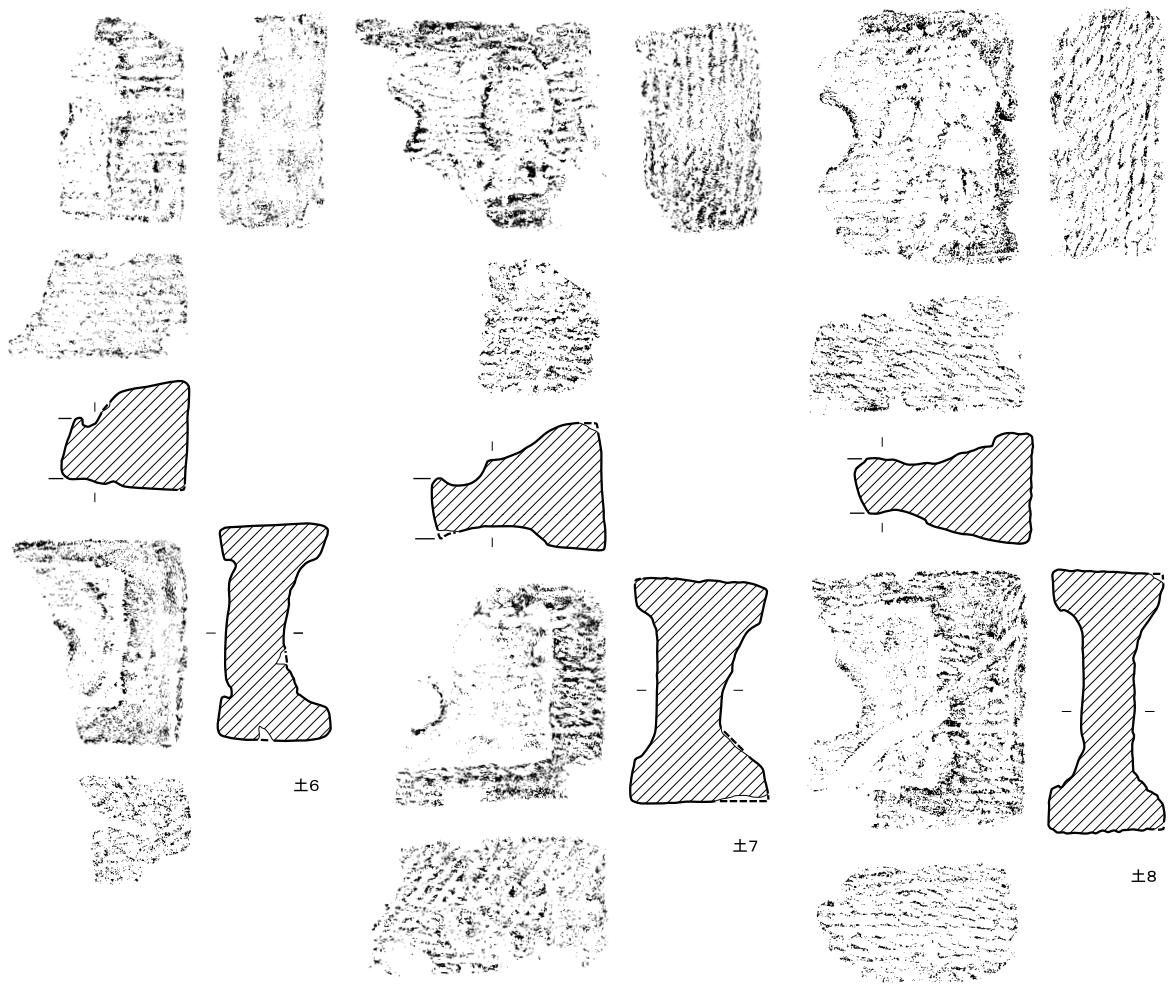


图21 土製品拓影及び実測図2 (1 : 4)

土1は、今回出土したなかで最も残存状態が良好で、短辺の片側と孔が2箇所に残る。長辺は35cm程度に復元できる。下面および両側面には縄目痕が残り、下面は縁部から窪みまで連続した縄席が残る。上面の窪みは丁寧にナデられ、縄目痕は、ほとんど残らない。また、上面の窪みと縁部の境に、わずかな段が廻り、型のようなものを押し付けたようにも見える。上面窪み中央部には指先による沈線がある。表面には雲母が多く付着し、特に上面に目立つ。1群。

土2は、短辺の片側と孔が1箇所に残る。下面および両側面には縄目痕が残る。上面の窪みは丁寧にナデられ、縄目痕は残らないが、縁部には縄目痕がわずかに残る。また、上面の窪みと縁部の境に、わずかな段が廻る。短側面には沈線が2条ある。表面には雲母が多く付着し、特に上面に目立つ。1群。

土3は、中央部と孔が2箇所に残る。全面に縄目痕が残るが、上面窪みの縄目痕は弱く残り、「×」字状の沈線がある。また、上下面の窪みと縁部の境に、明瞭な段が廻る。表面には雲母が多く付着し、特に上面に目立つ。

土4は、短辺の片側と孔が1箇所に残る。下面および両側面には縄目痕が残り、下面の縄目痕は縁部から窪みまで連続する。上面の窪みは丁寧にナデられ、縄目痕は残らないが、縁部には縄目痕がわずかに残る。また、上面の窪みと縁部の境と縁部縁辺部に、わずかな段が廻る。表面には雲母が多く付着し、特に上面に目立つ。1群。

土5は、短辺の片側と孔が1箇所に残る。全面に縄目痕が残るが、上下面ともに縄目痕の残りが、やや弱い。また、上面の窪みと縁部の境に明瞭な段差、縁部縁辺部に、わずかな段が廻る。表面には雲母が多く付着し、各面で量的な多寡は見られない。1群。

土6は、短辺の片側と孔が1箇所に残る。厚さが5.7cmと、他の個体に比べるとやや厚い。窪みが不均一で、上面が浅く、下面が深い。全面に縄目痕が残るが、上下面ともにやや弱く縄目痕が残る。また、上下面の窪みと縁部の境に明瞭な段差、縁部縁辺部に、わずかな段が廻る。表面には雲母が多く付着し、各面で量的な多寡は見られない。1群。

土7は、短辺の片側と孔が1箇所に残る。厚さが7.1cmと今回出土した中では最も厚く、短辺の幅は11.6cmと1群より、やや幅が広い。窪みが不均一で、上面が浅く、下面が深い。下面は2段落ち状を呈する。全面に縄目痕が残り、下面の縄目痕は縁部から窪みまで連続する。上面の窪みは丁寧にナデられ、縄目痕が弱く残る。また、上面の窪みと縁部の境にわずかな段が廻る。表面には雲母が少量付着する。

土8は、短辺の片側と孔が1箇所に残る。短辺長が13.8cmと今回出土した中では最も幅が広い。下面および両側面には縄目痕が残り、下面は縁部から窪みまで連続した縄目痕が残るが、縁部から窪みにかけては指オサエにより不鮮明なところがある。上面の窪みは丁寧にナデられ、縄目痕はほとんど残らない。また、上面の窪みと縁部の境に明瞭な段差、縁部縁辺部にわずかな段が廻る。上面の窪みから縁部には指先による沈線がある。表面には雲母がわずかに付着する。2群。

土9～13は板状の埴で、厚さは1.4～2.1cm程度である。1cm台後半のものが多い。完形品がなく、平面形や孔の有無は確認できなかった。

土9は、今回出土したなかで、唯一角部が残存する。上面は縄目痕をナデ消す。また、上面の縁辺部に、わずかな段をもつ。

土10は、縁部が厚く、中央部が薄くなる。下面では厚さの変化点を境に縄目痕の方向が異なり、厚い縁部はタテ方向、薄い中央部はヨコ方向となる。

土11は、上面の縄目痕をナデ消すが、ナデがやや粗く指の痕が残る。上面に棒状工具による沈線がある。

土12は、上面の縄目痕をナデ消す。下面に棒状工具による沈線がある。

土13は、上面の縄目痕を丁寧にナデ消す。上面の縁辺部に、わずかな段をもつ。下面に棒状工具による沈線がある。

**壁土（土14・15）** 溝43から焼けた壁土片が多量に出土した。出土資料は拳大以下の小片が多く、機能時と考えられる面をもつ資料はわずかである。ここでは壁土として報告するが、どういった構築物を構成する部材であるかは、判断できなかった。また、土14と15では特徴が異なっており、別々の構築物を構成した部材の可能性はある。

土14は、扁平なもので、一面に平らな面が残り他の面は欠損する。少なくとも2層構造になっており、残存面の表面や表面から厚さ1.5cmまでには籾殻や藁と見られる茎状の繊維痕がある。これ以下には籾殻等は含まれず、胎土に直径1.5cm以下の礫を多量に含む。層の境は黒褐色を呈する。長軸12.0cm、短軸11.0cm、最大厚さ4.3cmである。色調は淡い赤褐色を呈する。

土15は、塊状のもので、一面に平らな面が残り、他の面は欠損する。層状の構造については不明である。胎土に2.5cm以下の礫を多量に、藁と見られる茎状の繊維痕を少量含む。長軸16.0cm、短軸10.0cm、最大厚さ9.5cmである。色調は淡い赤褐色を呈する。

## （5）石製品（図22、図版18）

石製品には砥石、硯、石鍋などがある。

**砥石（石1・2）** 石1の平面形は、ほぼ完形で、下面が剥離する。長さ8.3cm、幅3.5cm、残存厚0.9cm、重量36.9gである。石材は浅黄色の珪質頁岩である。側面の短辺と長辺は平滑であるが、

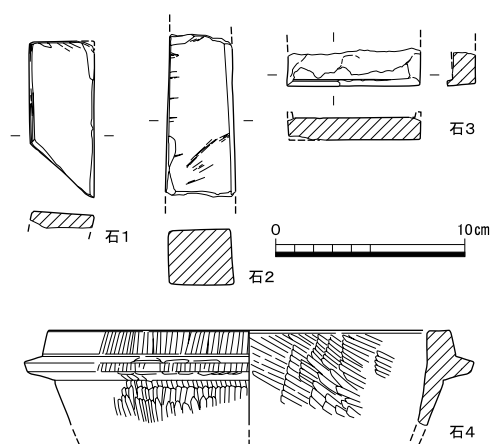


図22 石製品実測図（1：4）

側面の斜辺と表面は、それほど平滑ではなく、場所によって平滑度合いに差がある。石2の平面形、断面形はともに長方形である。短辺の両側は割れ面となるが、後世の欠損か使用時の状態か判断できない。残存長8.6cm、幅3.8cm、残存厚3.0cm、重量195.2gである。石材は青灰色の砂岩である。四面とも平滑となっており、実際に使用されたものと考えられる。ともに溝43から出土した。

**硯（石3）** 陸部から縁部の一部が残存する。残存長2.0cm、幅7.1cm、厚さは陸部で1.25cm、縁部で1.5cmで

ある。側面は硯陰から硯面に向かってわずかに広がる。石材は灰赤色の頁岩である。溝43から出土した。

石鍋（石4） 口径21.2cm、残存高5.0cmである。内外面ともに幅3～4mm程度の加工痕があり、外面は縦方向、内面は斜め方向に残る。土坑199から出土した。

## （6）金属製品（図23、図版18）

金属製品には鉄滓と銭貨がある。

鉄滓（金1） 椀形鍛冶滓である。およそ四分の一が残し、残存長6.8cm、残存幅5.4cm、厚さ0.6～2.3cm、重量72.0gである。直径10cm程度の円形に復元できる。断面形は中央部が一段高くなっており、少なくとも2回以上の作業が行われたものと考えられる。土坑18から出土した。

銭貨（金2～7） 調査で出土した点数は計10点で、内訳は北宋銭が6点、寛永通寶が2点、不明が2点である。このうち北宋銭6点を図化、報告する。金2は景德元寶で、重量3.653g。初鑄は景德元年（1004）。金3は皇宋通寶で、重量3.148g。初鑄は寶元元年（1038）。金4は熙寧元寶で、重量2.754g。初鑄は熙寧元年（1068）。金5は元豐通寶で、重量3.200g。初鑄は元豐元年（1078）。金6は元祐通寶で、重量3.356g。初鑄は元祐元年（1086）。金7は元符通寶で、重量2.297g。初鑄は元符元年（1098）。金2・3・6は第2面の土坑104から、3点が鏽着した状態で出土した。金4・7は調査区南西部第1面の遺構検出作業で、2点が鏽着した状態で出土した。金5は溝43から出土した。

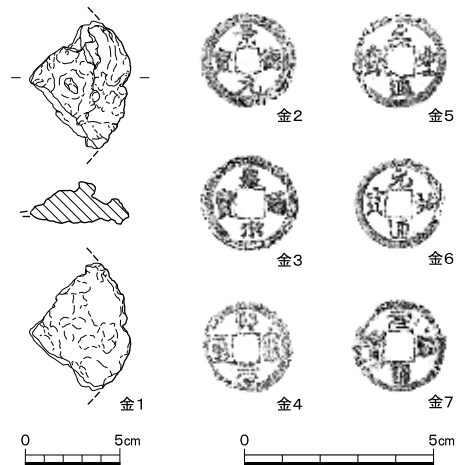


図23 金属製品実測図（1：4）、銭貨拓影（1：2）

## （7）骨（図版18）

人骨（骨1） 部位は右足の大腿骨で、両端は欠損し、骨幹部のみが残存する。残存長14.5cm、最大幅2.5cmである。溝43から出土した。

註

1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B	A B C	A B C	A B	A B C	A B C	A B C	A B C	A B	A B	A B

## 5. まとめ

本調査では、六波羅政庁跡推定範囲の北部で調査を行い、鎌倉時代から室町時代の遺構を検出した。また、基盤層の堆積構造、出土遺物の年代から、地形の形成過程についても把握することができた。以下では、今回の調査成果について、時期ごとに述べる。

**平安時代以前** 基盤層である砂礫層の堆積構造にはチャンネル構造が認められ、かつ、肉眼観察による鉱物組成（石英、長石、雲母が主で、チャートも少量含まれる）から鴨川由来の堆積物であることが明らかになった。砂礫層から出土した最も新しい時期の土器が、平安時代中期（3段階）であることから、少なくとも、この時期には鴨川の氾濫原となっており、居住地として土地利用が可能な地形条件ではなかったと考えられる。次に述べるように、本調査で確認できた本格的な土地利用の開始は、鎌倉時代になってからである。そのため、この間に、河道の移動や、それに伴う地形の安定化が進み、土地利用が可能な環境が整ったと考えられる。また、時期が異なるものの、『続南行雑録』によると安貞2年（1228）「七月二日鴨川出水により、当寺西門傾倒す。」とある。文献から調査地西側に位置する六波羅蜜寺の西門が洪水の被害にあっていることがわかる。六波羅蜜寺の現地表面の標高は約38.2m、本調査地の現地表面の標高は高いところで約35.2mと、六波羅蜜寺の方が、3m程度高く位置している。六波羅蜜寺境内は、発掘調査の結果、西に向かって低くなる地形となっており、西門は最も標高の高い平坦面よりも、低い位置に造られた可能性が考えられているが、それでも本調査地よりは標高が高い位置に西門が位置していたと考えられることから、本調査地が河川の影響を受けやすい立地であったことがわかる。

**平安時代後期** 調査地の南側には池殿町や門脇町といった地名が現在も残り、このうち池殿町には平清盛の弟である頼盛の邸宅である池殿が、門脇町には同じく弟である平教盛の邸宅である門脇殿があったことに由来するとされ、調査地周辺には平氏一門の邸宅が営まれていたと考えられている。しかしながら、本調査では、この時期の遺構・遺物を検出することができなかったため、その様相については不明である。

**鎌倉時代前半** 調査区の西側で溝180・190、東側で柱穴列1や少数の柱穴を検出した。平安時代の不安定な環境から、土地利用が可能な程度には安定した環境へと移り、土地利用が本格化し始める。溝190と溝180はほぼ重複する位置に溝が位置しており、意識的に掘削された可能性が高いが、溝190がL字状に屈曲するのに対し、溝180は東側で掘り止まるといった違いがある。この溝の堆積物に対し、花粉分析と寄生虫卵分析を行った（付章1）。その結果、水分が豊富な環境であったことや、糞便が集積している可能性が高いことが明らかとなった。このことから、周辺での人々の活動を傍証する。一方で、水が供給され続ける環境であったことがわかる。基盤層の形成過程を考慮すると水処理は、この土地を利用するにあたっての課題であった可能性が高く、溝180や溝190は排水処理の役割を担うとともに、東西の遺構の様相の違いから、何らかの区画施設であった可能性が考えられる。

**鎌倉時代後半** 調査区の南側で東西方向の溝2条（溝115と溝55、溝161と溝57が一連の溝であ

る)、溝より北側で井戸や土坑などを検出した。柱穴から建物を復元することはできなかったものの、井戸など人の居住を示すような状況を確認でき、鎌倉時代前半から継続して土地利用があったと考えられ、南側の東西方向の溝は、土地の区画施設として機能した可能性も考えられる。

調査地は、承久の乱後、承久3年(1221)に鎌倉幕府によって設置される六波羅探題の範囲に相当すると想定されており、この期間を通じて、土地利用があったことを明らかにすることができた。遺構の様相からは井戸や小規模な柱穴など、六波羅探題中枢部とは考えにくい状況を確認することができた。

**室町時代** 調査区の北半で東西方向の大規模な溝43、この溝より南側で柱穴や土坑などを検出した。柱穴から建物を復元することはできなかった。鎌倉時代までの溝は、調査区の南側に位置しているが、この時期の溝は調査区の北側に位置するようになる。検出できた最大幅は4.2mで、埋土の堆積状況を手がかりにすると、幅5m程度の溝に復元できる。鎌倉時代の溝とは、その位置や規模が異なっているため、これまでの溝を意識したものかどうかは判断しづらいが、寄生虫卵や糞便が由来と考えられる花粉が検出されていることから、生活排水が流入していた様子が見てとれる。このことから、元弘3年(1333)の足利氏による六波羅探題焼き討ち後も、土地利用が継続していたことが読み取れる。また、周辺調査3・4では、六波羅蜜寺と関係すると考えられている16世紀中頃の防御性を有すると考えられる堀や溝など、大規模な造成土が検出されている。時期や地点の性格に違いはあるものの、調査地周辺で室町時代における、活発な活動が考古学的に確認されてきている。

六波羅蜜寺境内を除くと、遺跡地図上での六波羅政庁跡の北部で初めての本格的な発掘調査となった。調査成果としては、遺構が形成される基盤層が、少なくとも平安時代中期まで鴨川の氾濫堆積物によって形成されていることを確認した。平安時代後期の遺構・遺物を検出することはできず、本格的な土地利用の開始は鎌倉時代になってからであること、室町時代においても土地利用が継続する様子を確認できた。調査地点における、いわゆる平安時代後期の六波羅邸、鎌倉時代の六波羅探題、史料の乏しい室町時代の土地利用の実態を明らかにすることができた点は大きな成果である。今後、周辺での発掘調査が進み、より詳細な実態が解明されることが期待される。

# 付章1 六波羅政庁跡の花粉分析と寄生虫卵分析

株式会社パレオ・ラボ

## 1. はじめに

六波羅政庁跡において発掘調査が行われ、中世の古植生を検討するために花粉分析用の試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。また、ほとんどの試料において寄生虫卵が検出されたため、寄生虫卵の産出が顕著な試料については寄生虫卵分析も実施し、試料の性質や当時の人々の食生活等についても言及した。

## 2. 試料と分析方法

表1 分析試料一覧

分析試料は、13世紀（溝180・190）と15世紀前半以降に埋没する（溝43）溝から採取された堆積物試料6点である。

遺構名	時期	層位・試料名	岩質	分析項目	
				花粉	寄生虫卵
溝43	15世紀前半	上部①	シルト	○	
		上部②	シルト	○	○
		下部	シルト	○	○
溝180	13世紀	下部	シルト	○	○
溝190	13世紀	中部①	砂混じりシルト	○	○
		下部②	シルト	○	

分析試料一覧を表1、採取地点の層序を図1に示す。このうち花粉分析にはすべての試料を、寄生虫卵分析には4試料を供した。これらの試料について、以下の手順にしたがって花粉分析と寄生虫卵分析を行った。

### 2-1. 花粉分析

試料（湿重約3～4g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。この残渣より適宜プレパラートを作製した。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。ただし、数枚のプレパラートを検鏡しても樹木花粉が200にとどかない試料もあった。さらに、保存状態の良い花粉を選んで単体標本（PLC.4373～4376、4378）を作製し、図3に載せた。

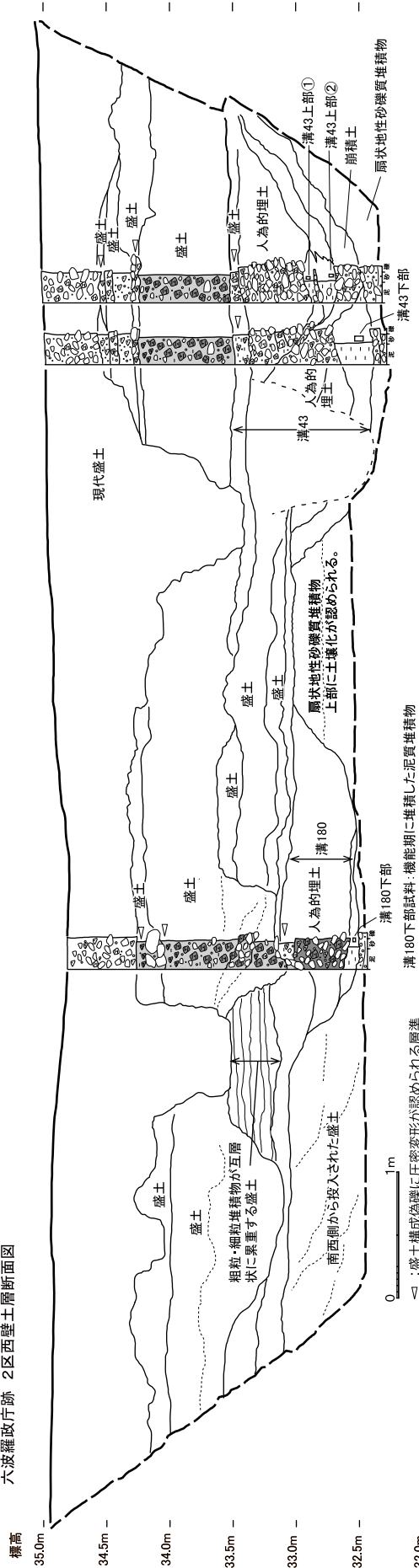
### 2-2. 寄生虫卵分析

試料を乾燥後、遠沈管にとり、計量した。花粉分析と同様の手順で処理を施し、得られた残渣に適容量のグリセリンを加えて計量した。この残渣からプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り検鏡した。なお、試料1g中の寄生虫卵含有数は次式で求めた。

$$X = BD/AC$$

X：試料1g中の寄生虫卵含有数、A：分析に用いた試料の重量（g）、B：濃縮試料+グリセリンの重量（g）、C：濃縮試料+グリセリンのうち、封入に用いた重量（g）、D：プレパラート中の寄生虫卵数

六波羅政庁跡 2区西壁土層断面図



溝180下部試料：機能期に堆積した泥質堆積物

◁：盛土構成偽礫に圧密変形が認められる層準

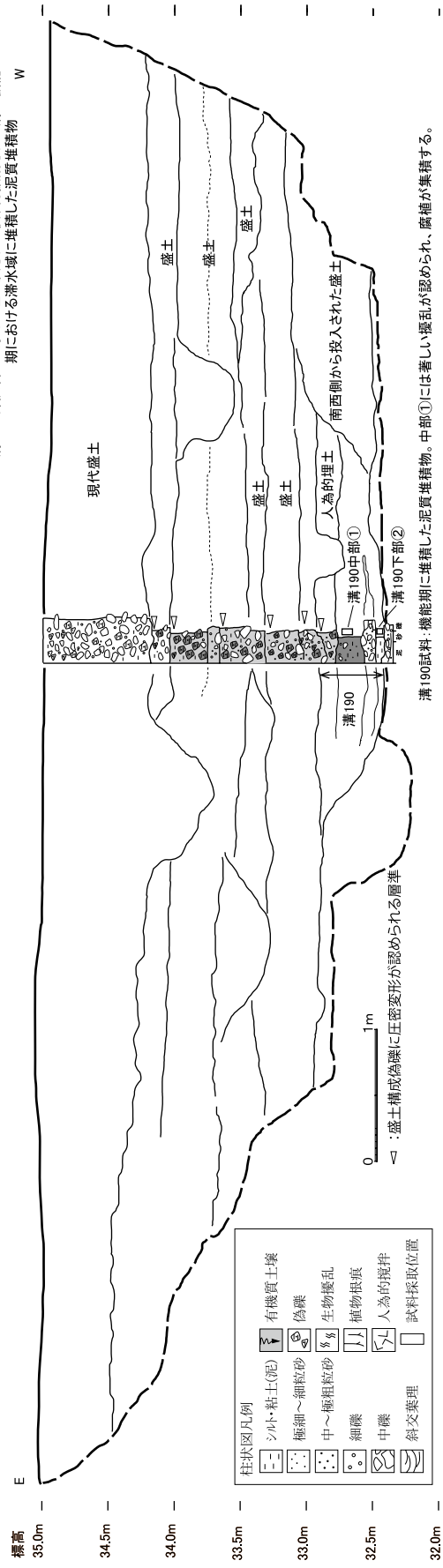
溝43下部試料：清浄期期の滞水域において堆積した泥質堆積物

(採取位置は裏壁の同一層準)

溝43上部試料：人為的に埋め戻された後、再掘削された溝の機能期における滞水域に堆積した泥質堆積物

W

六波羅政庁跡 2区南壁土層断面図



溝190試料：機能期に堆積した泥質堆積物。中部①には著しい擾乱が認められ、腐植が集積する。

柱状図凡例	
	有機質土壌
	偽礫
	生物擾乱
	植物根痕
	人為的埋土
	試料採取位置

図1 調査地点の層序および試料採取位置

また、保存状態の良い寄生虫卵を選んで単体標本（PLC.4377、4379）を作製し、図3に載せた。

### 3. 分析結果

#### 3-1. 花粉分析

6試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉28、草本花粉21、形態分類のシダ植物胞子2の、総計51である。これらの花粉・胞子の一覧表を表2に、花粉分布図を図2に示した。花粉分布図において、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図および表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科-イラクサ科-アサ科やバラ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

#### 3-2. 寄生虫卵分析

計量し、検鏡した結果を表3に示す。検鏡の結果、4試料からは回虫卵と鞭虫卵、肝吸虫卵が検出された。寄生虫卵数は、15世紀前半の溝43下部で567個/cm<sup>3</sup>、溝43上部②で472個/cm<sup>3</sup>、13世紀の溝190中部①で1418個/cm<sup>3</sup>、13世紀の溝180下部で4148個/cm<sup>3</sup>である。

### 4. 考察

一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境下で堆積すると紫外線や土壌細菌などによって分解され、消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。ほとんどの試料で十分な量の花粉化石が得られていないため、試料採取地点は好気的環境が卓越していたために、花粉が分解・消失してしまった可能性がある。

そうした中、13世紀とされる溝190の試料からは十分な量の花粉化石が産出した。溝190では浮葉植物のヒシ属が検出されているため、13世紀の試料採取地点は水分が豊富な場所であった可能性がある。周辺の湿潤な場所にはハンノキ属やサワグルミ属-クルミ属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、トチノキ属などが、開けた明るい場所にはマツ属複維管束亜属やアカメガシワ属などが生育しており、より広範囲の場所にはスギ林や、カシ類・シイ類からなる照葉樹林が分布を広げていた可能性がある。

草本花粉ではイネ科やアカザ科-ヒユ科、アブラナ科などの産出が目立ち、栽培植物としてソバ属やベニバナ属も検出された。試料採取地点には、これらの分類群が生育していた可能性があるが、溝190では寄生虫卵が検出されているため、人が食した植物が反映されている可能性も考えられる。すなわち、寄生虫卵はトイレ遺構の糞便の堆積物1cm<sup>3</sup>の中に1,000個から10万個くらい入っているといわれ（金原，1997）、溝190では試料1cm<sup>3</sup>中に4148個が確認されたため、糞便が集積している可能性が高い。糞便にはイネ科やアカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ソバ属、ベニバナ属が含まれている例が知られており、これらの花粉が糞便に残る要因としては、次のような理由が考えら

表2 産出花粉化石一覧表

学名	和名	上段：遺構名 中段：年代 下段：層位・試料名					
		溝43		溝180		溝190	
		15世紀前半		13世紀		13世紀	
		上部①	上部②	下部	下部	中部①	下部②
樹木							
<i>Abies</i>	モミ属	-	-	1	2	2	2
<i>Tsuga</i>	ツガ属	-	-	2	-	3	-
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	-	3	11	5	29	6
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	-	2	1	-	4	1
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	-	15	47	14	50	8
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	1	-	-	1	-
<i>Pterocarya-Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	-	-	-	-	4	-
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	-	1	1	-	6	1
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	-	-	-	-	1	1
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	3	1	-	4	2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	4	1	-	9	1
<i>Fagus</i>	ブナ属	-	-	-	-	2	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	-	4	-	-	3	5
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	-	3	6	1	41	6
<i>Castanea</i>	クリ属	-	1	1	5	6	7
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	-	-	-	-	8	3
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	-	1	-	2	3	-
<i>Celtis-Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	-	-	1	-	14	-
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	-	-	-	-	4	-
Celastraceae	ニシギギ科	-	-	-	-	1	-
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	-	-	-	-	2	-
<i>Sapindus</i>	ムクロジ属	-	-	-	-	-	1
<i>Vitis</i>	ブドウ属	-	1	-	-	-	1
Araliaceae	ウコギ科	-	-	-	-	1	-
<i>Cornus</i>	ミズキ属	-	1	-	-	-	-
Ericaceae	ツツジ科	1	-	-	-	1	-
<i>Diospyros</i>	カキノキ属	-	-	-	-	3	-
<i>Trachelospermum</i>	テイカカズラ属	-	-	-	-	1	-
草本							
Gramineae	イネ科	3	37	21	17	222	442
Cyperaceae	カヤツリグサ科	-	2	-	1	2	-
Moraceae-Urticaceae-Cannabaceae	クワ科-イラクサ科-アサ科	-	2	-	-	1	2
<i>Rumex</i>	ギンギシ属	1	20	1	-	1	-
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	サナエタデ節-ウナギツカミ節	1	-	1	-	-	-
<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	イタドリ節	2	-	-	-	-	-
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1	2	2	2	2	3
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	9	76	93	26	45	37
<i>Portulaca</i>	スベリヒユ属	1	-	3	1	-	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	2	3	3	11	3
Brassicaceae	アブラナ科	-	26	2	-	11	9
Rosaceae	バラ科	-	-	-	-	1	1
<i>Trapa</i>	ヒシ属	-	-	-	-	2	-
<i>Circaea-Oenothera</i>	ミズマタソウ属-マツヨイグサ属	-	-	-	-	1	-
Apiaceae	セリ科	-	2	-	-	1	1
<i>Solanum</i>	ナス属	-	-	-	-	5	-
<i>Ambrosia-Xanthium</i>	ブタクサ属-オナモミ属	-	2	-	-	-	-
<i>Carthamus</i>	ベニバナ属	-	-	-	2	4	4
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	2	20	1	2	9	10
Tubuliflorae	キク亜科	-	23	8	3	66	10
Liguliflorae	タンポポ亜科	-	1	-	1	2	6
シダ植物							
Monolete type spore	単条溝胞子	-	1	-	-	-	-
Trilete type spore	三条溝胞子	-	1	-	-	3	-
Arboreal pollen	樹木花粉	1	40	73	29	203	45
Nonarboreal pollen	草本花粉	21	215	135	58	386	529
Spores	シダ植物胞子	-	2	-	-	3	-
Total Pollen&Spores	花粉・胞子総数	22	257	208	87	592	574
Unknown pollen	不明花粉	-	15	-	-	198	20



表3 試料の計量値と寄生虫卵数

項目	上段：遺構名		中段：年代		下段：層位・試料名	
	溝43		溝180		溝190	
	15世紀前半		13世紀		13世紀	
	上部②	下部	下部	中部①		
分析に用いた試料(g)	3.4868	2.7849	2.8124	2.902		
残渣+グリセリン(g)	1.625	0.8574	0.9435	1.6675		
封入に用いた量(g)	0.0315	0.0333	0.028	0.0229		
試料の密度(g/ml)	1.14	1.52	1.94	1.74		
回虫卵(個)	2	-	17	32		
鞭虫卵(個)	26	36	37	52		
肝吸虫卵(個)	-	2	-	4		
不明(個)	-	3	7	7		
試料1g当たりの寄生虫卵数(個/g)	414	379	731	2384		
試料1cm当たりの寄生虫卵数(個/cm)	472	576	1418	4148		

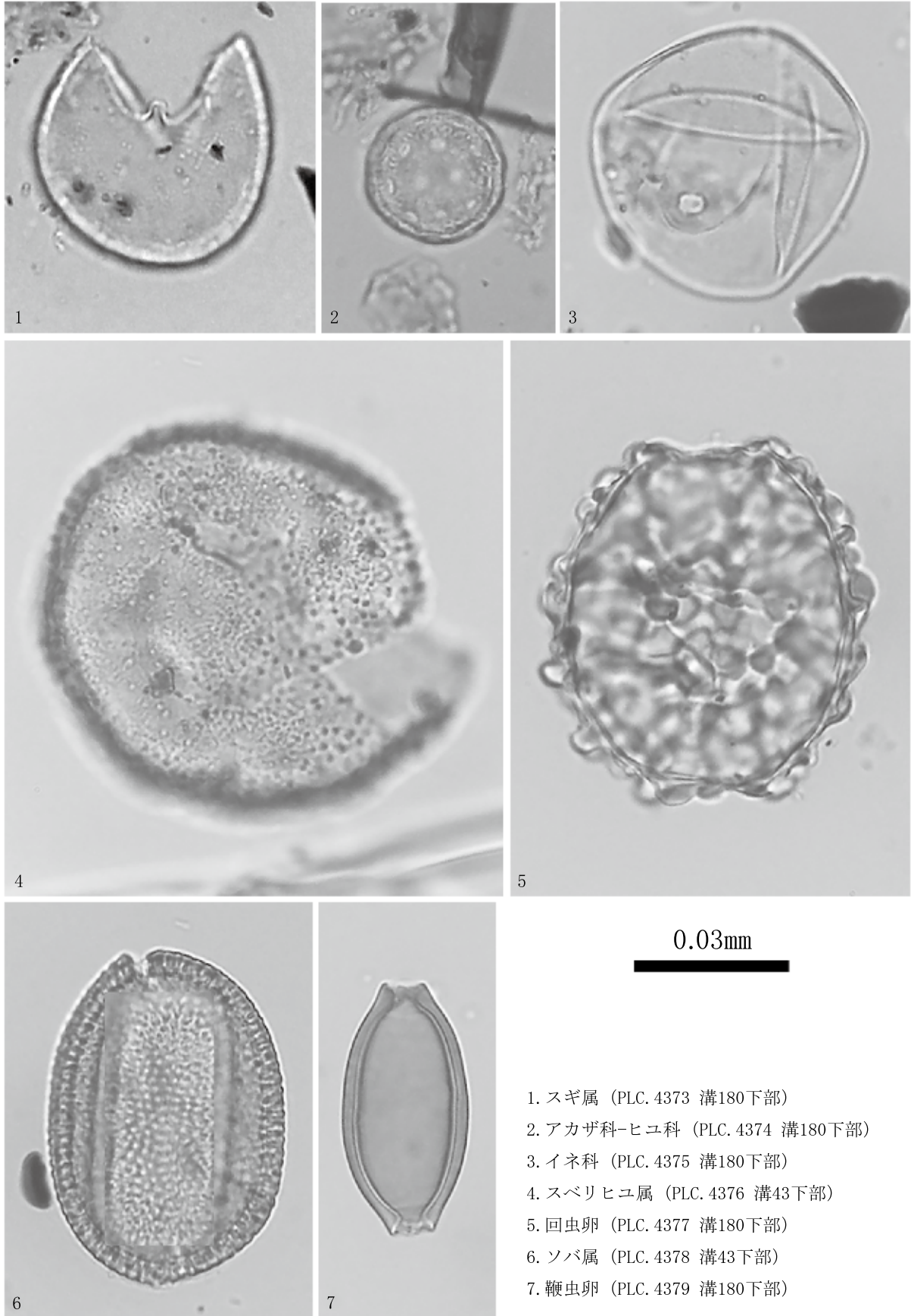
れている。イネやソバは開花後すぐに籾が閉じ、籾の中に多くの花粉が閉じ込められてしまうため、脱穀作業で籾を取っても微細な花粉が残ってしまう（金原，1997）。簡易的に検証すると、特に玄米には花粉が多く付着している。そのようなお米やソバの実を食すると、糞便として花粉が排出される。アブラナ科は、アブラナなどをお浸しとして花芽が付いたまま食するし（金原，1997）、ベニバナ属やアカザ科-ヒユ科については、虫下しや腹痛時の薬として用いられていたのではないかという指摘がある（黒崎，1997）。溝190から検出された草本花粉は、トイレ遺構等で検出される花粉と同類であり、寄生虫卵と共産している点から考えると、人が食した植物の花粉が多く含まれている可能性が高い。寄生虫卵が検出された15世紀前半の溝43下部・上部、13世紀の溝180においても、十分な量の樹木花粉が得られていないにもかかわらず、イネ科やアカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ソバ属などは多く産出しており、これらの試料においても人が食した植物の花粉が検出されている状況が窺える。

また、4つの試料から検出された寄生虫卵は、鞭虫卵と回虫卵、肝吸虫卵である。鞭虫と回虫は生活史も感染経路も同じであり、糞便と共に排泄された寄生虫卵を、野菜や野草などの食物や飲み水とともに摂取すれば感染する（金原，2000）。また、肝吸虫はコイ科を主とする淡水魚を第2中間宿主とするため、コイ科の魚を生食か不完全な調理で摂取すれば感染する（金原，2000）。よって、当時の人々は野菜や野草、コイ科の淡水魚を生食や不完全な調理で食していたと考えられる。

（森 将志）

#### 引用文献

- 金原正明（1997）自然科学的研究からみたトイレ文化. 大田区立郷土博物館編「トイレの考古学」：197-216, 東京美術.
- 金原正明（2000）古代遺跡にみる植物・トイレ文化. エコソフィア民族自然誌研究会, 3, 71-79.
- 黒崎 直（1997）考古学の発掘現場におけるトイレ研究. 大田区立郷土博物館編「トイレの考古学」：183-196, 東京美術.

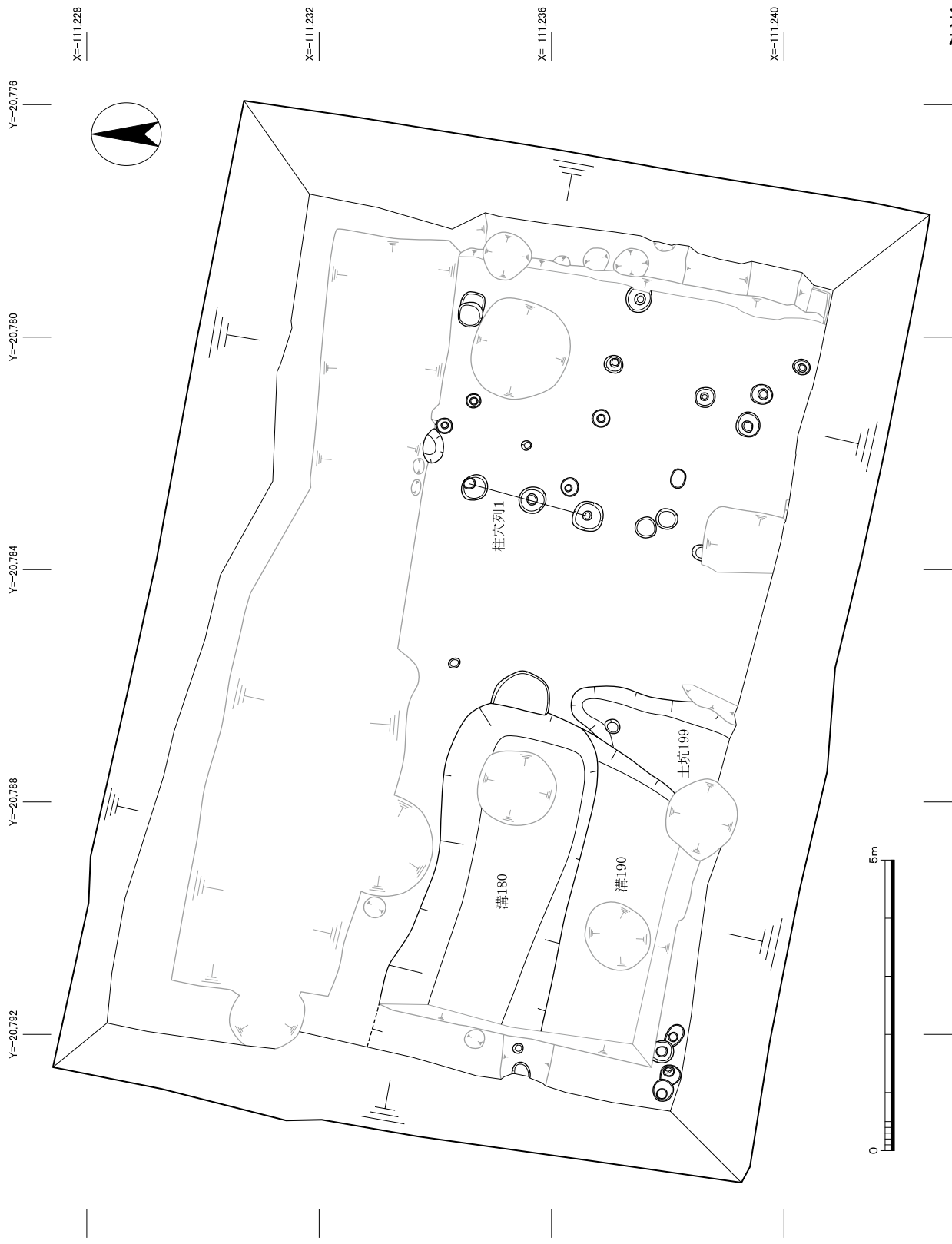


1. スギ属 (PLC. 4373 溝180下部)
2. アカザ科-ヒユ科 (PLC. 4374 溝180下部)
3. イネ科 (PLC. 4375 溝180下部)
4. スベリヒユ属 (PLC. 4376 溝43下部)
5. 回虫卵 (PLC. 4377 溝180下部)
6. ソバ属 (PLC. 4378 溝43下部)
7. 鞭虫卵 (PLC. 4379 溝180下部)

図3 産出した花粉と寄生虫卵

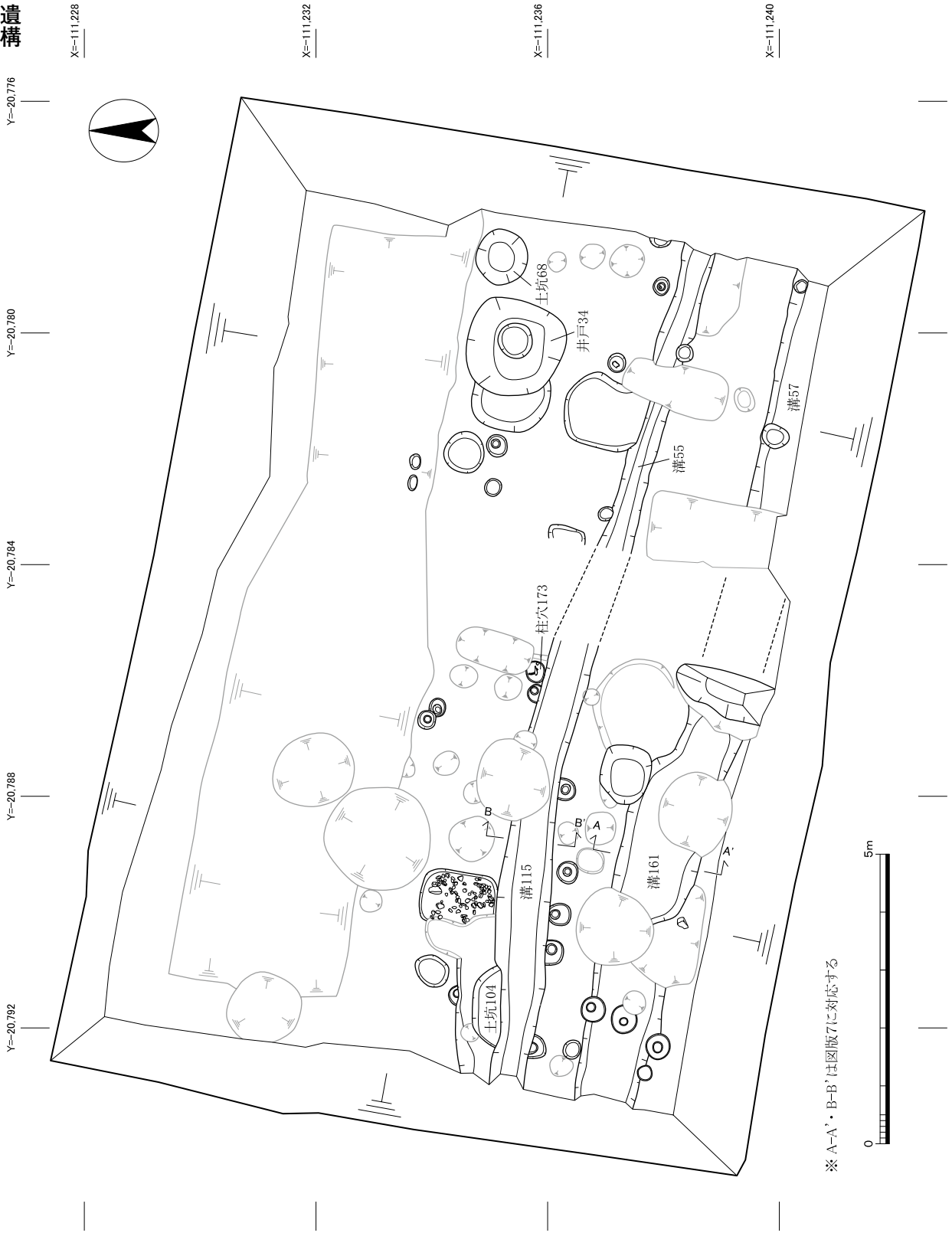
# 圖 版



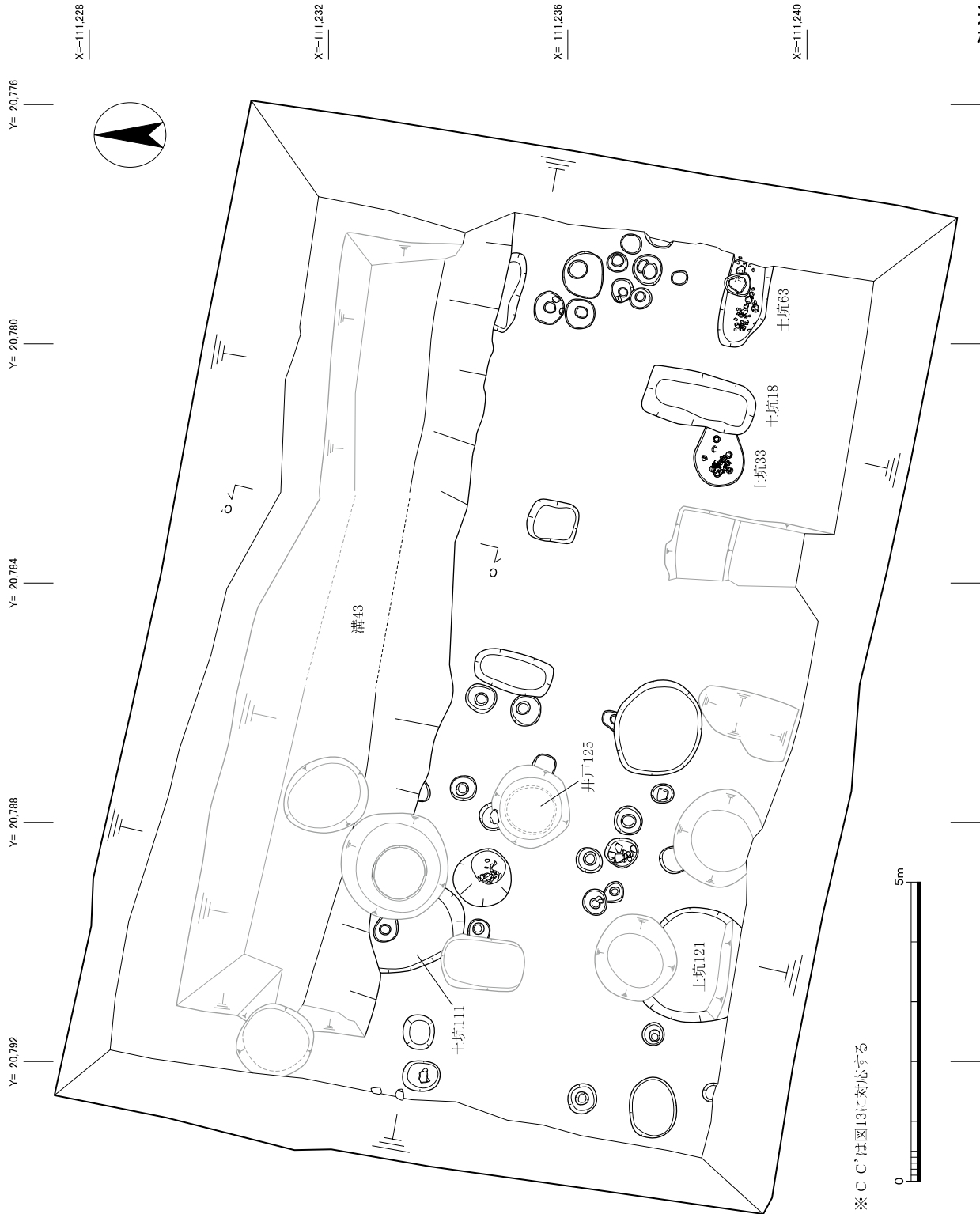


第3面遺構平面图 (1 : 100)

図版2  
遺構

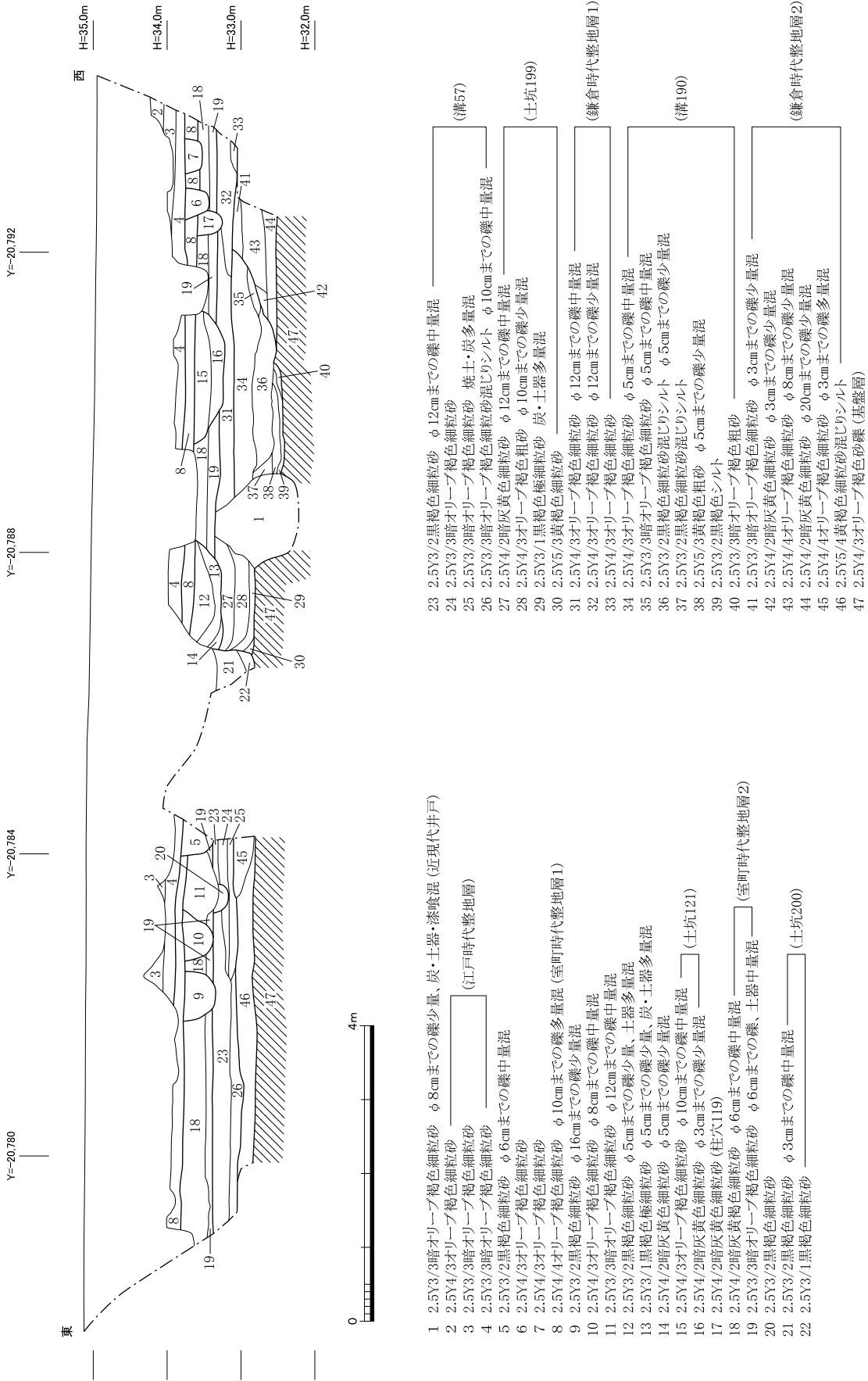


第2面遺構平面図 (1 : 100)



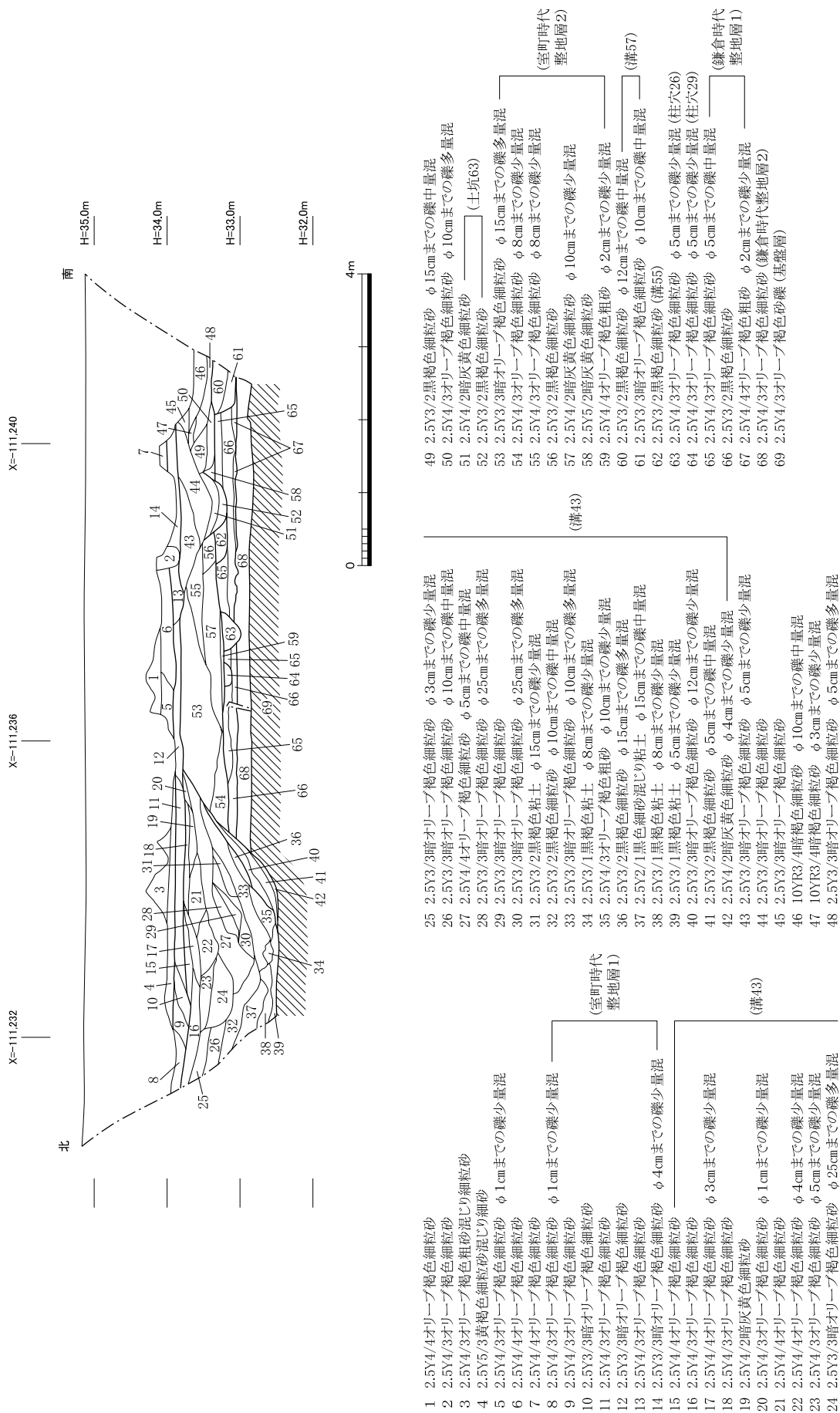
第1面遺構平面図 (1 : 100)

図版 4  
遺構



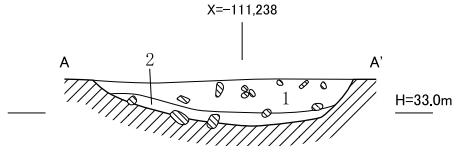
調査区南壁断面図 (1 : 80)

調査区東壁断面図 (1 : 80)





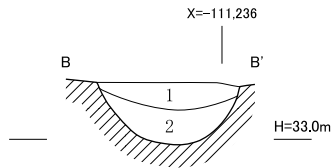
溝161



- 1 2.5Y4/1黄灰色細粒砂 φ7cmまでの礫中量混
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂 φ7cmまでの礫少量混

※ A-A'は図版2に対応する

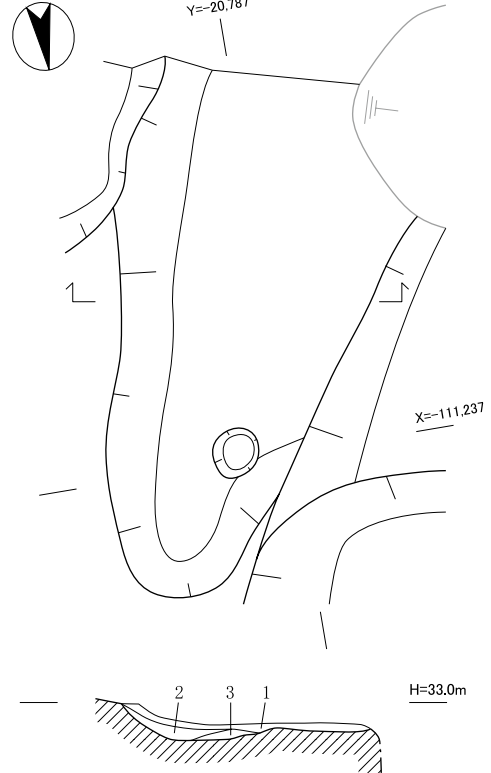
溝115



- 1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂
- 2 2.5Y3/2黒褐色細粒砂

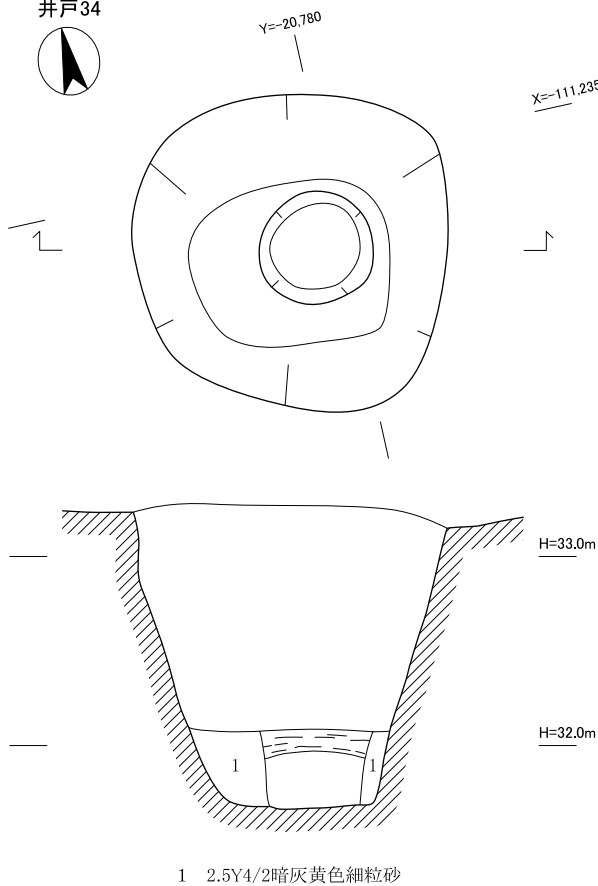
※ B-B'は図版2に対応する

土坑199



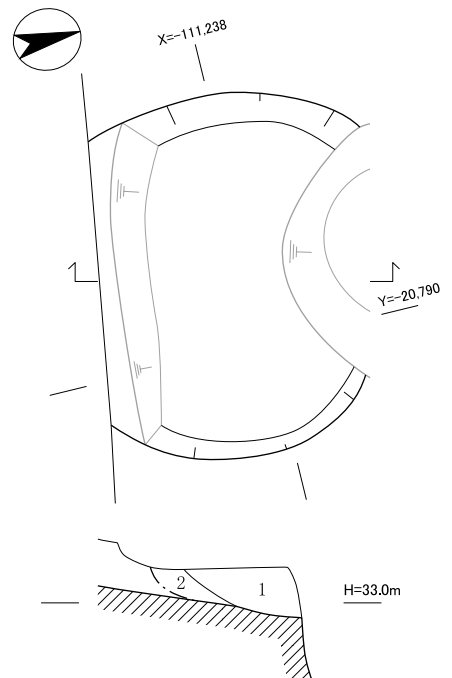
- 1 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂 炭・土師器片多量に混
- 2 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
- 3 2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂

井戸34



- 1 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂

土坑121



- 1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂
- 2 2.5Y3/2黒褐色細粒砂





1 第3面東半全景（北東から）



2 第3面西半全景（北東から）



1 溝180・190（南西から）



2 溝180・190断面（北東から）



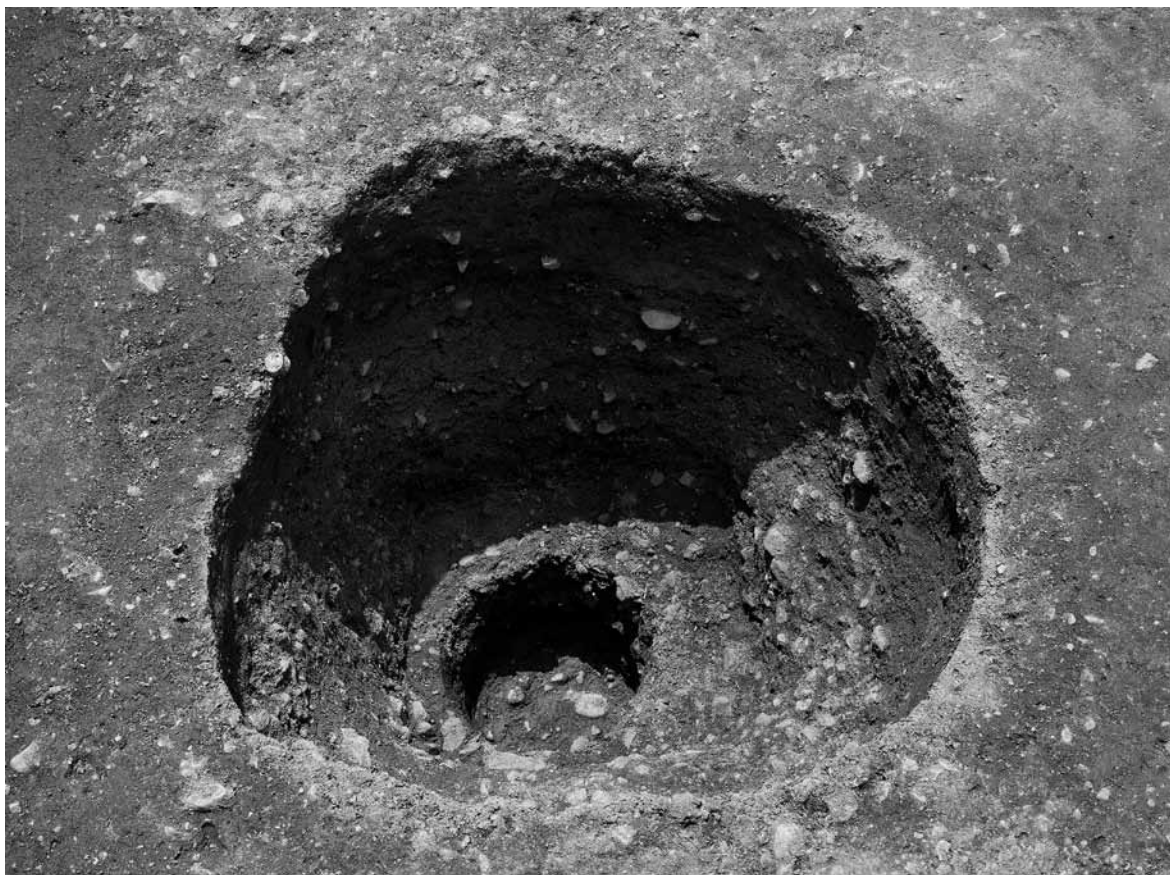
3 土坑199（北から）



1 第2面東半全景（北東から）



2 第2面西半全景（北東から）



1 井戸34 (北東から)



2 溝161 (南東から)



3 土坑68 (北東から)



1 第1面東半全景（北東から）



2 第1面西半全景（北東から）



1 溝43東半（北西から）



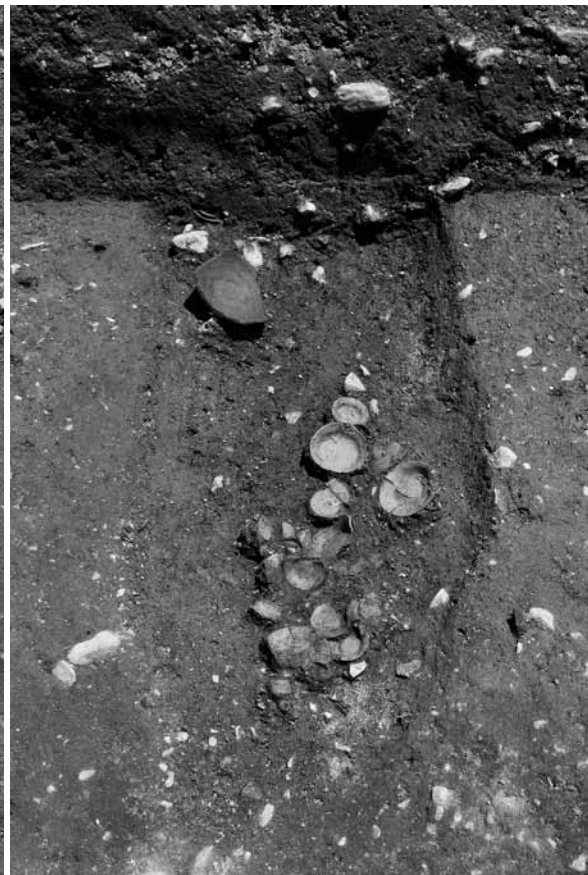
2 溝43西半（南東から）



3 溝43中央部断面（南東から）



1 土坑33遺物出土状況（北から）



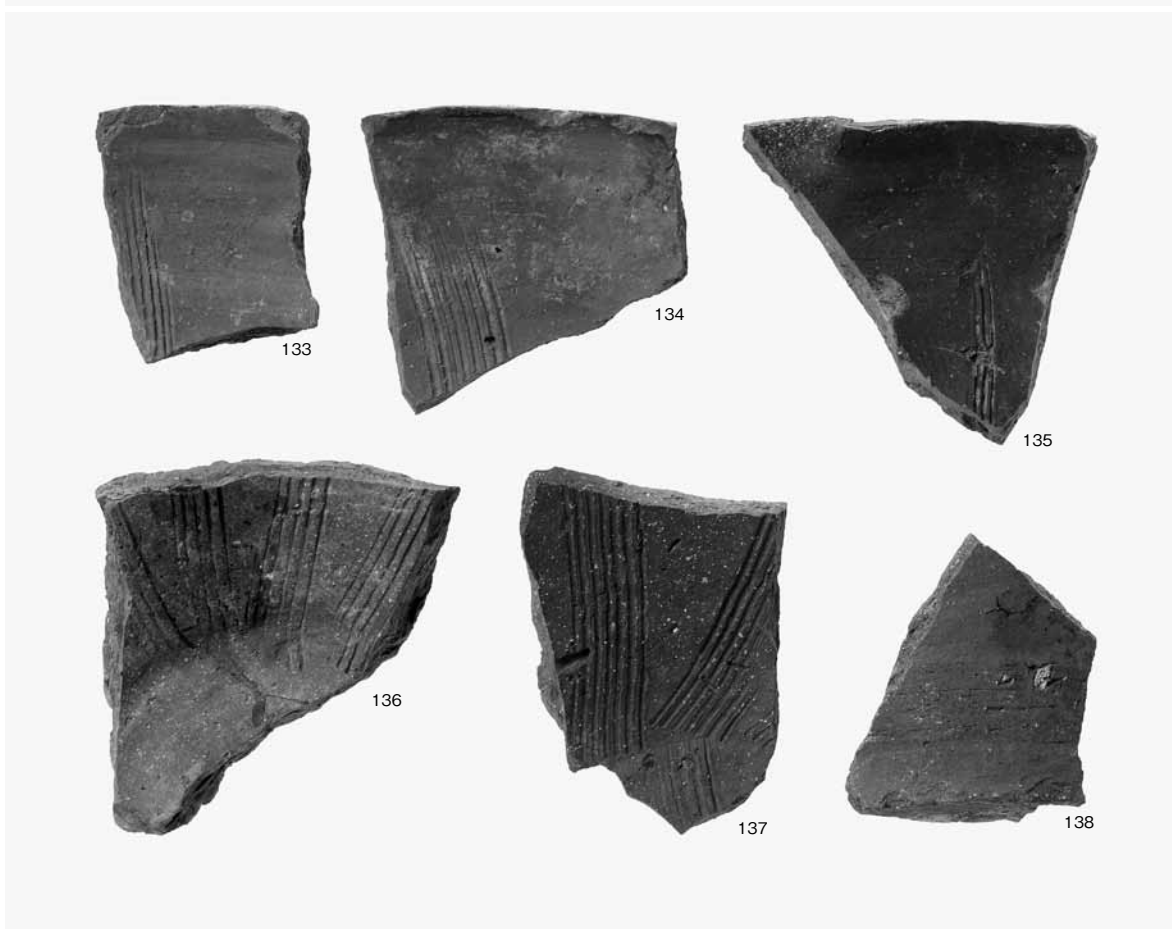
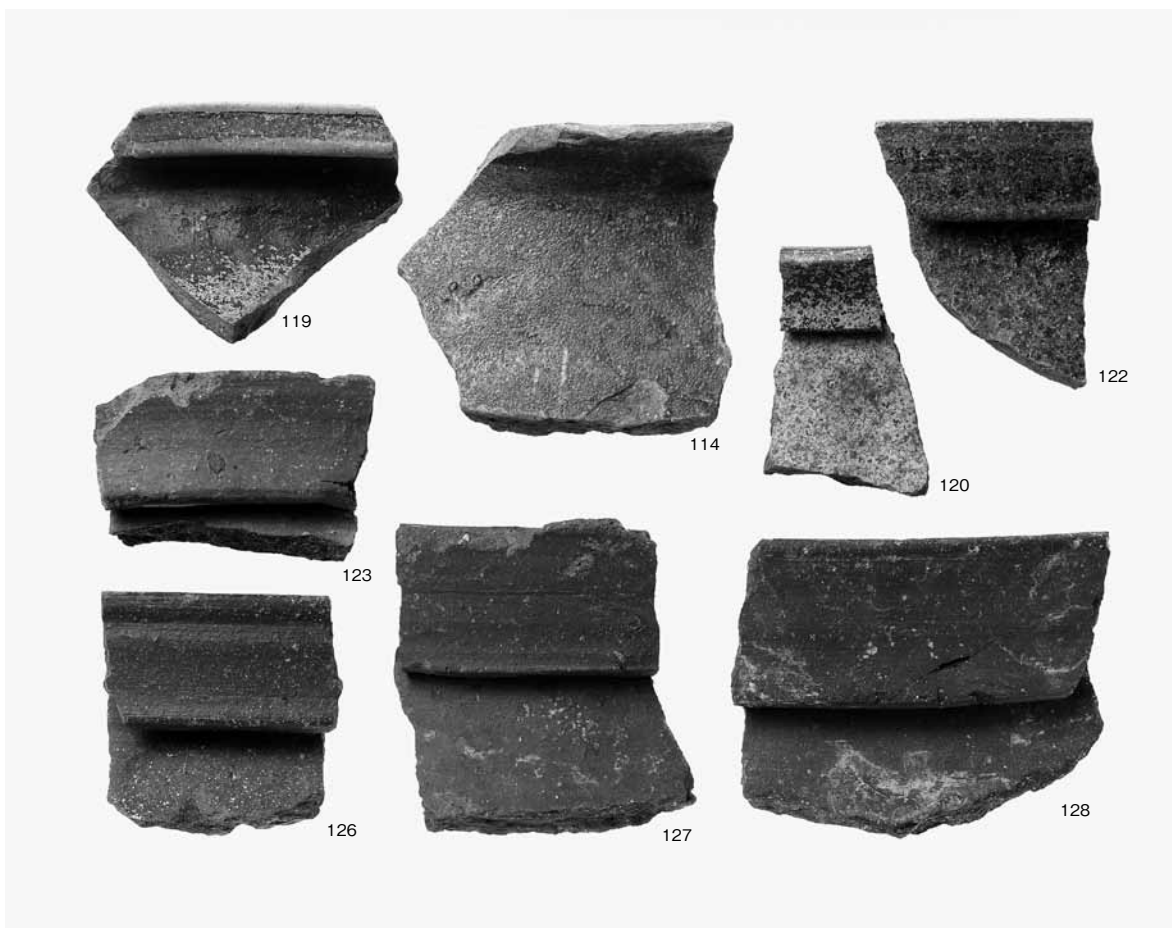
2 土坑63遺物出土状況（北西から）

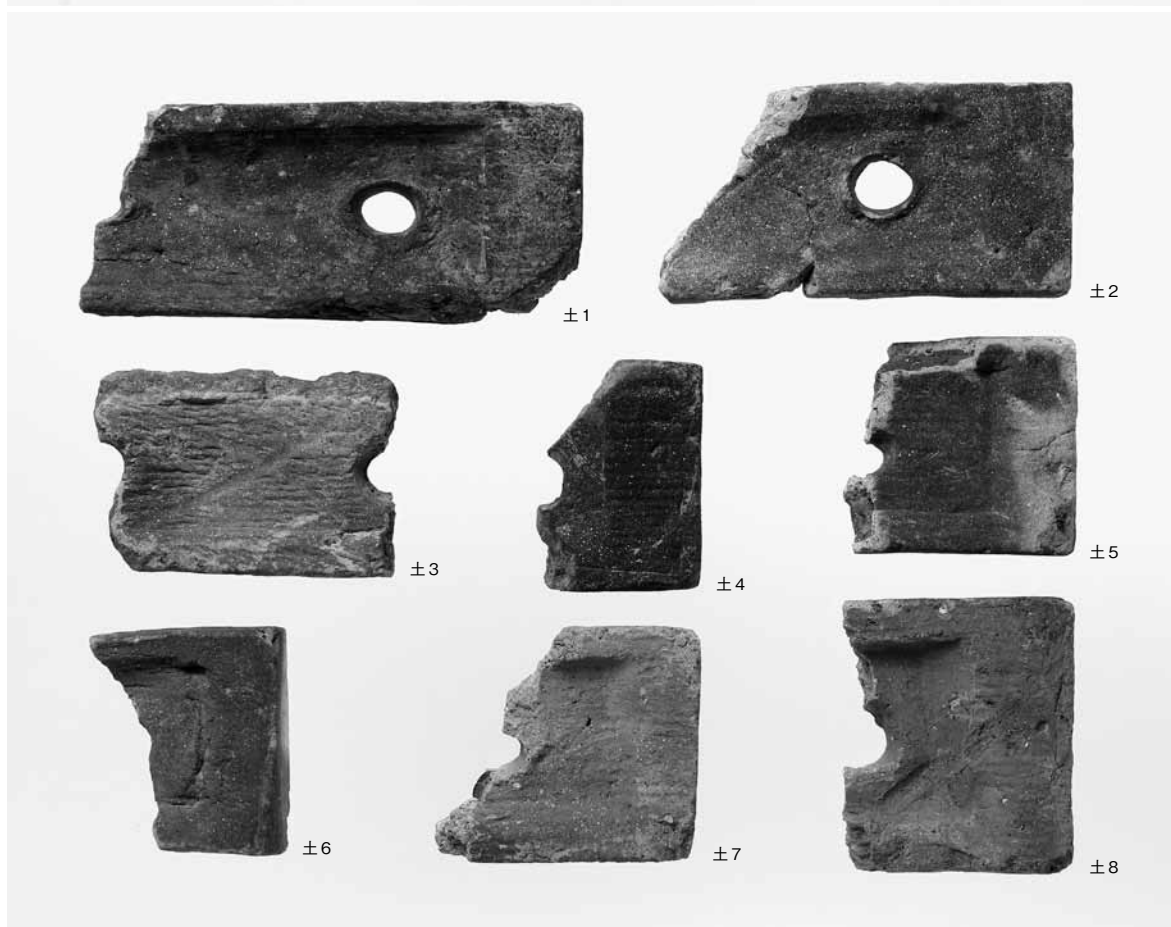
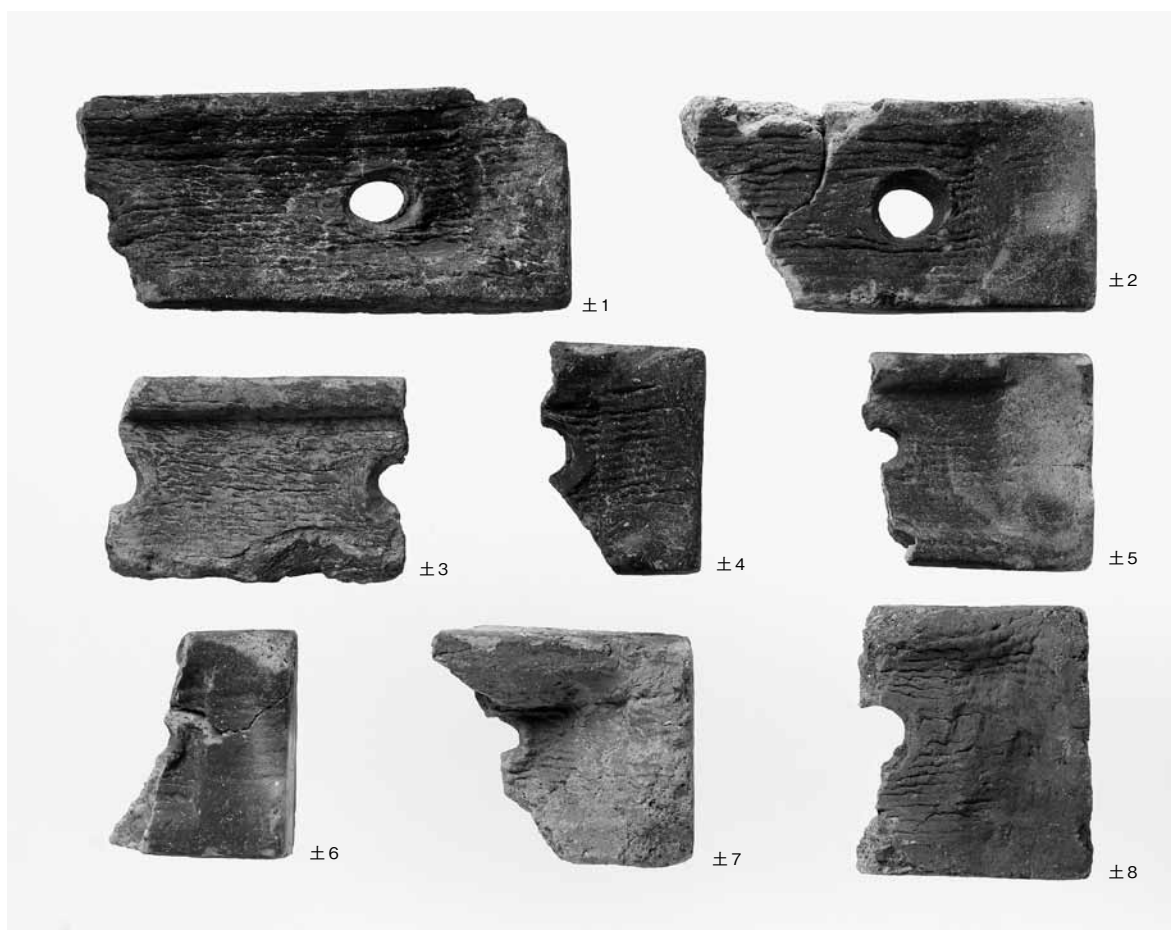


3 調査区南壁西半断面（北東から）

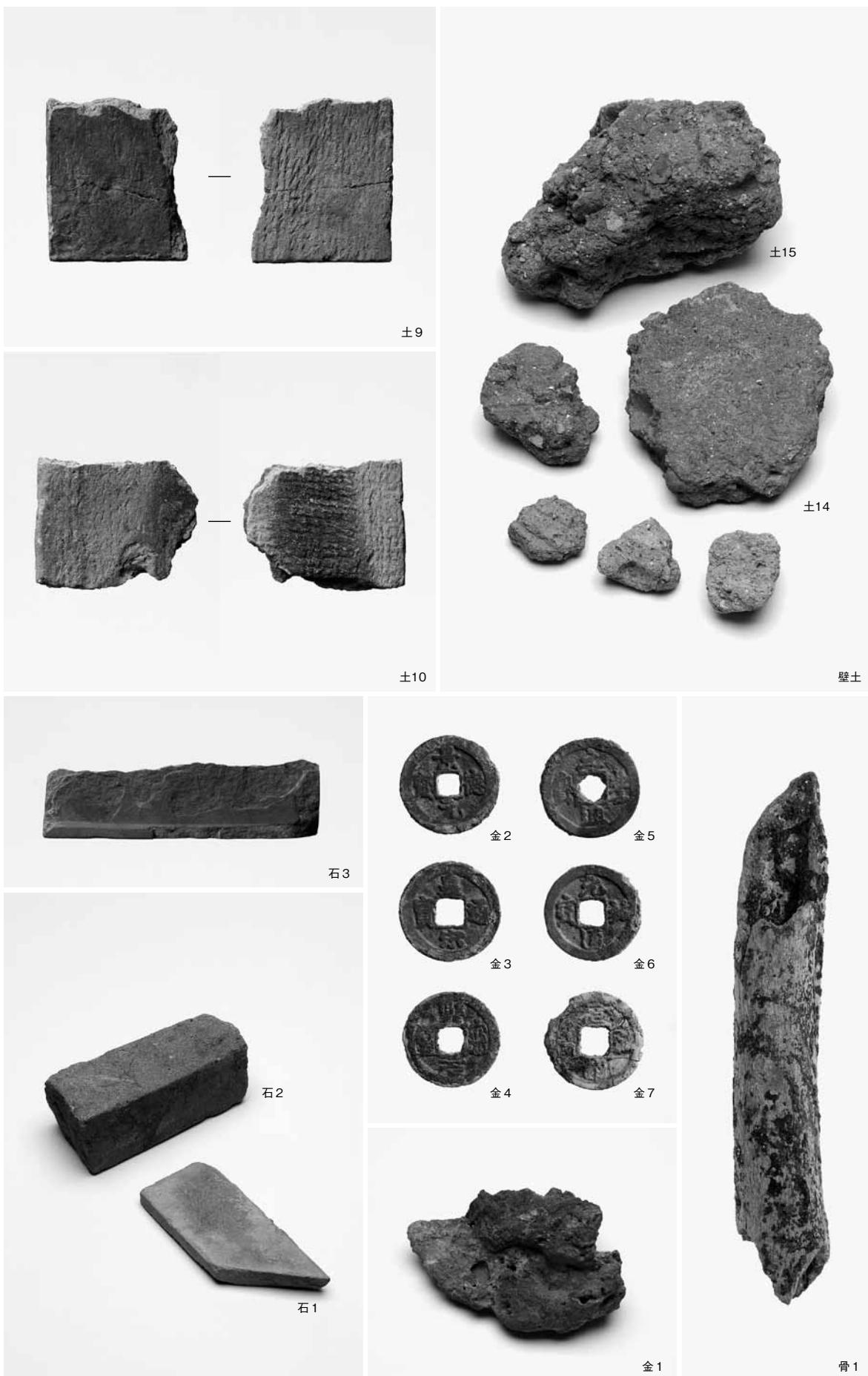


土器類 1





土製品 1



土製品2、石製品、金属製品、骨

# 報告書抄録

ふりがな	ろくはらせいちょうあと							
書名	六波羅政庁跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2025-5							
編著者名	鈴木康高							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2026年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ろくはらせいちょうあと 六波羅政庁跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 やまとおおじごじょう 大和大路五条 あがるやまぎきちょう 上る山崎町  341-2、345、  345-1他	26100	540	34度 59分 49秒	135度 46分 20秒	2025年4月 7日～2025 年7月18日	204㎡	宿泊施設 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
六波羅政庁跡	都城跡 邸宅跡	平安時代	基盤層	土師器、須恵器、灰釉陶器		基盤層は平安時代中期までの遺物を含む河川堆積物によって形成されたことを明らかにした。 鎌倉時代から室町時代にかけての土地利用の様相を明らかにした。		
		鎌倉時代	溝、井戸、土坑、柱穴列	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品、銭貨、				
		室町時代	溝、土坑	土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、土製品、石製品、金属製品、骨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2025-5

## 六波羅政庁跡

発行日 2026年5月31日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番  
〒602-8358 TEL 075-467-5151